

佐賀大学留学生センター自己点検報告書
—平成22年度—

平成23年9月

目 次

1. 目的・目標	1
2. 留学生センターの概要	3
3. 領域別の自己点検評価	5
(1) 教育の領域	5
ア 教育の目標・成果に関する事項	5
イ 教育内容・活動に関する事項	5
ウ 教育環境に関する事項	5
エ その他教育に関する事項	5
(2) 研究の領域	18
ア 教員及び教育支援者に関する事項	18
イ 選択的評価基準A 研究活動の状況に関する事項	18
ウ 平成22年度の留学生センター教員の研究状況	21
(3) 学生支援の領域	25
ア 教育に関する事項(留学生の修学/日本人学生の留学/留学生と日本人学生の交流等)	25
イ 生活に関する事項	28
(4) 国際交流・社会貢献の領域	33
ア 教員および学生の国際交流に関する事項	33
イ 教育および研究における社会連携・貢献に関する事項	36
(5) 組織運営の領域	39
ア 管理運営に関する事項	39
イ その他組織運営に関する事項	43
4. その他	47
(1) 平成22年度の外部評価	47
添付資料一覧	49

1 目標・目的

(1) 観点ごとの分析

基本的観点 1-1 留学生センターの目的（教育研究活動を行うに当たっての基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定された大学一般に求められる目的に適合するものであること。

基本的観点 1-2 目的が大学の構成員に周知されているとともに、社会に公表されていること。

基本的観点 1-3 教育課程や教育方法などを検討する教務委員会などの組織が適切な構成となっているか。また、必要な回数の会議を開催し、実質的な検討が行われているか。

（観点到係わる状況）

留学生センターは教員数が少ないため、学部の教務委員会に相当する組織はない。昨年度からは、センター教員の中から教務担当を決め、教務担当のもと、日本語各レベルのコーディネーターを中心にカリキュラムや年次計画が作成されている。その結果は、まず教員会議で、その後留学生センター運営委員会で説明をし、審議・承認を得ている。

（分析結果とその根拠理由）

多くの場合、教務委員会がなくても担当コーディネーターを中心にしてスムーズに進むが、重要な課題は、担当コーディネーター及び教務主任を中心に前もって議論されなければならない。必要に応じて留学生センター運営委員会に諮る前に教員会議を開催し議論している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

留学生センター運営委員会で審議され、決定されるので客観的な判断のもとでカリキュラムや年次計画が立案されている。

（改善を要する点）

教務委員会に代わるものがないため、昨年度から新たに二教務担当を設置した。これにより、カリキュラム全般を教務主任が把握できるようになったが、各レベル間の連携、および非常勤講師との連絡体系の確立の2点が課題として残る。

留学生センターの目標・目的

平成 22 年度の留学生センターの目標・目的は、中期計画／中期目標の年度計画に示されて

いる。すなわち：

1. 留学生のための日本語教育の改善と充実
 - (1) シラバスや、授業内容を見直し改善につとめる
 - (2) 図書や教材を充実させ、留学生のための勉学の環境を整える
2. 留学生のための修学指導の充実
3. 留学生のための生活相談支援の充実
 - (1) チューター制度の改善
 - (2) 宿舍の整備・充実
 - (3) 奨学金に関する情報の提供や申請の手続きの支援
4. 留学生と地域社会との交流の促進
 - (1) 地域の交流イベント情報の提供
5. 日本人学生のための海外留学支援の充実
 - (1) 海外語学研修を実施する
 - (2) 海外留学に関する援助や情報を提供する
 - (3) 留学生センター英語教育部門での海外留学のための英語教育を実施する
6. 教員による研究活動の促進
 - (1) 学会での発表や学会誌等への論文発表を促進する
 - (2) 外部からの研究費の獲得に努力する
7. 留学生センターの活動の情報を発信する
 - (1) ホームページの充実
 - (2) 英語版ホームページの充実
 - (3) 教員の研究活動をホームページに掲載する
8. 国際的交流を推進する
 - (1) 帰国留学生とのネットワークを構築する
9. 教員の授業および活動内容を評価するためのデータを収集する

「基本的観点1-1および1-2をふまえた自己点検評価」

留学生センターの目標・目的は、「留学生センター中期計画／中期目標」の年度計画に明確に示されている。また、その内容は、大学一般および佐賀大学での留学生のための教育及び修学指導に求められている目的に適合するものである。留学生センター中期計画／中期目標の作成にあたっては、センター教員全員で協議し決定している。「留学生センターの目標・目的が大学の構成員に周知されている」に関しては、「留学生センター中期計画／中期目標」をとおして周知されている。また、留学生センターの目標・目的が社会に公表されているかに関しては、留学生センターの刊行物やホームページ上で公表されている。留学生センターの情報提供には、ホームページは有効な手段である。今年度からは、更新頻度を高めるため、CMSシステムの構築を行い、更新頻度を劇的に高めることに成功した。

2 留学生センターの概要

基本的観点2-1 佐賀大学での留学生への教育と修学指導が充分に行われてきたか、またその活動状況をチェックし、適宜修正していくなどの努力が払われてきたかどうか。また、留学生センターでの活動状況を佐賀大学内外に周知する努力をしてきたかどうか。

留学生センターは、勉学・研究する外国人留学生及び海外の大学に留学を希望する学生に、必要な日本語教育と指導助言及び留学の資料の提供、指導を行う教育・研究施設として、平成12年4月1日に設置された。設立当初は、センター教員は2名であったが、平成17年には7名に増員され、現在は、7名で運営している。

留学生センターでは下記のような業務を行っている。

①日本語・日本事情教育

学部留学生を対象に、正規の授業科目として日本語と日本事情を開講している。日本事情の授業は、学部の教員により、それぞれの専門分野から見た日本事情について講義が行われている。

②大学院入学前予備教育（日本語研修コース）

主に国費留学生（研究留学生及び教員研修留学生）を対象に、大学院等への進学又は教育研修のために必要な日本語教育を6ヶ月間集中的に行っている。このコースは、4月と10月に開講される。

③日本語総合コース

大学院生、研究生、外国人研究者を対象とした日本語プログラムで、初級から上級まで新カリキュラムにて開講している。

④短期留学プログラム(SPACE)

佐賀大学と交流協定を締結している外国の大学から留学生を一年の期間で受け入れ、日本語・日本事情及び英語による専門科目を提供する全学的なプログラムである。留学生センターは日本語教育とそのコーディネートとを担当している。

⑤留学生に対する修学上及び生活上の指導助言

本学で学ぶ留学生が修学・進学や日常生活の面で悩みを抱えたときに、適切な指導助言を与え、担当者のオフィスアワーの表示をおこなうなど、解決に向けたサポートを行う体制を整えている。

⑥海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言

海外留学を希望する学生のために、留学に関する資料を提供するとともに、修学上及び生活上の指導助言を行う体制を整えている。また、オーストラリアとアメリカの交流締結校での短期（4週間～6週間程度）の海外語学研修も実施している。

⑦地域との留学生交流の推進

佐賀地域留学生交流推進協議会の幹事校となるなど、地域の国際交流団体やボランティア・グループとの連携を図り、留学生がより充実した留学を送れるようバックアップを行うとともに、学内外の国際交流を促進している。

⑧留学生と日本人学生との交流の促進

年1回の「国内研修旅行」および、「スタディツアー」の実施、さらには、日本語の授業の一環として日本人学生を授業に招いて「ビジターセッション」を実施するなど、留学生と日本人学生との交流を促進している。

⑨留学生教育の調査研究

留学生の日本語教育を始め、留学生の受入・派遣に伴う問題や、入学後の問題等に関し、調査研究に取り組んでいる。

「基本的観点2-1をふまえた自己点検評価」

留学生センターでは、留学生の多様な教育的ニーズに応えるべく、新カリキュラムにおいて対応してきた。これにより柔軟な履修が可能となり履修者数も増加傾向にある。また、日本語コースの内容が留学生のニーズに合致しているかどうかを確認するため、学期末にはアンケートを実施し客観的評価を得られるように務めている。それをもとに専任・非常勤教員は授業改善を行っている。また、留学生センターの活動の周知については、センター刊行物やホームページを通じて行っている。ホームページの情報は頻繁に更新されるようになり、訪問者数も継続して1万人を越えている。引き続き、最新情報をいち早く掲載することに務めたい。

3. 領域別の自己点検評価

- ア) 教育の目標・成果に関する事項
- イ) 教育内容・活動に関する事項
- ウ) 教育環境に関する事項

留学生センターの教員は、主に、正規課程以外の教育サービスとして、佐賀大学に在籍する留学生、研究生、特別聴講生（短プロ、SPACEの学生、一般受け入れの学生）に日本語教育を行っている。正規課程の学生への教育サービスとしては、1) 教養教育の「日本語 Ia」、「日本語 Ib」、「日本語 Ic」、「日本語 IIa」、「日本語 IIb」、「日本語 IIc」（『佐賀大学留学生センター紀要』10号、130～132ページを詳しくは参照）、2) 文化教育学部 of 日本語教師養成科目の「日本語教育概論（1年後期）」、「日本語教授法 I（2年前期）」、「日本語教授法 II（2年後期）」、「日本語教育実習（3年前期）」、3) 教養教育の主題科目「統語論入門：佐賀西部方言を初期射程にして」、「アカデミック・ジャパニーズ」を教えている。後者については、提供・開講部局である教養教育運営機構と文化教育学部で自己点検を任せる。ここでは、留学生への日本語教育について自己点検を行う。

- エ) その他教育に関する事項

選択的評価基準 B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況

選択的評価基準 B-1 大学の目的に照らして、正規課程の学生以外に対する教育サービスが適切に行われ、成果を上げていること。

(1) 観点ごとの分析

観点 B-1-① 大学の教育サービスの目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が周知されているか。

観点 B-1-② 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

観点 B-1-③ 活動の結果及び成果として、活動への参加者が十分に確保されているか。また活動の実施担当者やサービス享受者等の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。

観点 B-1-④ 改善のための取組が行われているか。

（観点にかかわる状況） 1) 日本語教育、2) 留学生センターが運営するプログラム、そして、3) その他の教育サービスについて観点にかかわる状況をここで提示する。

1. 日本語教育

平成 22 年度春・秋学期は、前年度カリキュラムの改革の方針にのっとり、運営を行った。カリキュラム改革では、すべてのレベルで、大学生活および学術的な活動で使用されているアカデミック・ジャパニーズが、実践で使える日本語運用力が身につくことを目標としている。この目標を達成すべく、各レベルの日本語コース・科目が順次、設定されている。

授業に先立って、すべての科目・コースでシラバス、評価基準等を定めた。それらを受講案内の冊子にまとめ、日本語コース受講希望者に配布した。春学期には 103 名、秋学期には 88 名が受講した。

コース実施に先立って、受講希望者のレベル判定のためのプレースメントテストを行った。また、本年度から、学生による授業評価アンケートをすべての日本語科目・コース、および、教師に関して行うようになった。学生の評価を参考に、教師はそれぞれ、改善点を分析し留学生センター長に報告し、授業改善に役立てた。

各学期の各科目・コースの受講者数については、『佐賀大学留学生センター紀要』10号、109～120 ページの部分から以下に抜粋した。

日本語コース受講者数（2010 年度前期）

総受講者数 103 名

授業科目別受講者数

授業科目名	記号	受講者数
初級前半 A コース	J-101	3
初級前半漢字	J-111A	6
初級前半文法	J-111B	3
初級前半会話	J-111C	3
初級前半読解	J-111D	3
初級前半発音・リスニング	J-111E	1
初級後半 B コース	J-202	16
初級後半漢字	J-211A	7
初級後半文法	J-211B	6
初級後半会話	J-211C	5
初級後半読解	J-211D	2
初級後半発音・リスニング	J-211E	2
初中級 A コース	J-301	11
初中級 B コース	J-302	7
初中級漢字	J-311A	20
初中級会話	J-311C	7

初中級読解	J-311D	9
中級読解	J-402	15
中級会話	J-403	15
中級作文	J-404	16
中級聴解	J-405	10
中上級読解	J-502	8
中上級発表	J-503	7
中上級聴解	J-504	11
中上級作文	J-505	8
上級日本語クリニック	J-602	12
外国人のための日本語教授法	J-603	10
アカデミック・プレゼンテーション	J-604	24
上級作文	J-605	6

身分別受講者数

身 分	受講者数
大学院生	24
学部生	19
研究生	12
特別聴講生	46
科目等履修生	1
研究員	1
計	103

平成 22 年度 10 月期

日本語コース受講者数 (2010 年度後期)

総受講者数 88 名

授業科目別受講者数

授業科目名	記号	受講者数
初級前半 A コース	J-101	10
初級前半 B コース	J-102	15
初級前半漢字	J-111A	6
初級前半文法	J-111B	7
初級前半会話	J-111C	14
初級前半読解	J-111D	6

初級前半発音・リスニング	J-111E	5
初級後半 B コース	J-202	9
初級後半漢字	J-211A	5
初級後半文法	J-211B	8
初級後半会話	J-211C	9
初級後半読解	J-211D	9
初中級 A コース	J-301	5
初中級 B コース	J-302	4
初中級漢字	J-311A	8
初中級会話	J-311C	5
初中級読解	J-311D	5
中級読解	J-402	13
中級会話	J-403	17
中級作文	J-404	17
中級聴解	J-405	14
中級漢字	J-406	12
中上級読解	J-502	3
中上級発表	J-503	6
中上級聴解	J-504	4
中上級作文	J-505	4
上級コミュニケーション	J-602	6
外国人のための日本語学習法	J-603	9
アカデミック・プレゼンテーション	J-604	5
上級作文	J-605	6

身分別受講者数

身 分	受講者数
大学院生	33
学部生	1
研究生	21
特別聴講生	29
科目等履修生	1
教員・研究員	3
計	88

2. 留学生センターが管理・運営するプログラム：

1) 短プロ (SPACE)

プログラムの目的は、『平成 22 年度留学生交流支援制度（短期受入れ）＜プログラム枠＞申請書（以下「申請書」）』の（２）「プログラムの概要」の③「プログラムの目的・目標」を参照してほしい（SPACE Brochure の 1 ページ「Objective」にもある）。

カリキュラムの概要については、『申請書』の（２）「プログラムの概要」の④「プログラムの内容・特色」（SPACE Brochure の 4 ページの「Academic Program」）を参照してほしい。内容・計画は、留学生センター運営委員会で、SPACE Brochure の更新の審議の中で、審議している。専門選択科目の提供については、留学生センター運営委員会の学部からの委員を通して、毎年、各学部依頼している。短プロ (SPACE) で履修する科目やコースのシラバスについては、資料の選択科目と「日本事情研修」のシラバス、「日本語受講案内」中の日本語の科目のシラバスを見てほしい。

計画に基づき、実施できた。2010 年度秋学期からの SPACE に 50 名程度の応募があり、応募書類によって、学生が受け入れを希望する佐賀大学の学部の受け入れ可・非と学生の学業成績をもとに、留学生センター運営委員会で審議し 20 名を選考した。

第 9 期後期（春学期）：2010 年 4 月～9 月

第 9 期の SPACE では、学生全員が留学を後期にも予定通り続け、学生数は 20 名であった。第 9 期の日本学生支援機構（JASSO）からの奨学金受給者は、15 名であった。（昨年度、報告したように、出身国別の人数は、韓国 3 名、中国 3 名、台湾 4 名、インドネシア 3 名、スリランカ 2 名、タイ 1 名、ベトナム 1 名、バングラデシュ 1 名、フランス 2 名であった。また、受け入れ学部別に見ると、文化教育学部 7 名、経済学部 6 名、理工学部 2 名、農学部 5 名であった）。

なお、留学生運営委員会に置いてプログラム修了を審議し、20 名中、19 名がプログラム修了証を取得した。1 名は、秋学期に専門選択科目を 2 単位しか取得できず、修了証を得られなかったが、これは、必須科目の 4 単位を履修できなかったためである。

本学期の『日本事情研修』の内容については、『紀要』の 124 ページにまとめられている。後述されるが、日本事情研修の学外研修は、1) 玄海エネルギーパーク、福岡市民防災センター見学、2) 鹿島の高校生と交流およびホームステイ、3) 鹿島ガタリンピック参加、4) 日本茶道、5) 小城市の天山酒造・村岡総本舗羊羹資料館。選択科目については、その時間割が『紀要』の 125 ページにある。

第 10 期前期（秋学期）：2010 年 10 月～2011 年 3 月

第 10 期の学生数は 20 名で、出身国別の人数は、中国 6 名、台湾 4 名、韓国 2 名、インドネシア 1 名、スリランカ 2 名、アメリカ 1 名、ベトナム 2 名、バングラデシュ 1 名、フランス 1 名である。また、受け入れ学部別に見ると、文化教育学部 11 名、経済学部 4

名、理工学部2名、農学部3名となっている。第10期の日本学生支援機構（JASSO）からの奨学金受給者は、8名であった。

本学期の『日本事情研修』の内容については、『紀要』第10号の126-127ページにまとめられている。後述されるが、学外研修は、1) バルーンフェスティバル、2) 伊万里（焼き物の絵付けも体験）、吉野ヶ里遺跡、3) 剣道体験（佐賀大学剣道部の指導）、4) 小城市、天山酒造・村岡総本舗羊羹資料館。選択科目については、その時間割が『紀要』の127ページにある。

例年、3～4名程度の学生がた短プロ（SPACE）を修了し、母国の大学を終えた後、日本の大学院に再度、留学しており、これは、本短プロ（SPACE）が目的を達成していることを示している。成果公開としては、一人の学生に代表して、短プロ（SPACE）でどのようなことを成果を得たかに関するレポートを書いてもらい、留学生センターニュースに掲載した。

必須科目1) 日本語科目とコースと2) 『日本事情研修』については、アンケートをし、学生の評価を参考に、それぞれ、担当教員は、授業を改善した。『日本事情研修』の研修旅行については、短プロ（SPACE）の学生の間で、また、日本人学生と短プロ（SPACE）学生とが懇親する機会となっていると好評を得ている。

表 第9期後期（春学期）

4月14日 授業開始
8月20日 修了式

表 第10期前期（秋学期）

10月1日 オリエンテーション
10月4日 入学式・日本語プレースメントテスト
10月5日 日本語コース・オリエンテーション

2) 日本語研修コース

日本語研修コースは、半年の研修期間修了後に、大学や大学院での授業に参加するための日本語力を身につけることを目的としている。前年度からのカリキュラムの改革によって、J-101、J-102、J-201 J-202、J-301 J-302 のいわゆる本編コース（週6回の授業）に加えて、各レベルで開講されているリメディアルの各授業（J-111、J-211、J-311）をすべて履修している受講生のみ「集中コース」としての研修コースに参加しているとみなされることとなった。

春学期：初級前半1名、初中級1名の学生が研修コースを修了した。

秋学期：中級1名の学生が研修コースの学生として認定されたが、修了はしなかった。

3) 日本語・日本文化研修生

日本語・日本文化研修生は、文科省の奨学金を得て日本語や日本文化の研修を1年間行う学生である。本学では留学生センターが受け入れとなっているが、留学生センター開講科目だけではなく、幅広い専門知識を身につけるため、全学教養教育機構、文化教育学部と緊密な連携をとったプログラム運営を行っている。そのため、全学教養教育機構、文化教育学部と受講可能科目や単位認定の方法などについても調整を行った。日本語・日本文化研修留学生用の募集要項は、文化教育学部の教授会で承認された。

2009年度後期から受け入れたベトナムからの日本語・日本文化研修生1名が2010年前期も引き続き佐賀大学で学んだ。日本語・日本文化研修生は、教養教育科目としての日本語、日本事情を必修科目として履修するとともに、文化教育学部で開講される日本語教育や日本の文学、社会、文化、歴史等に関する学部学生向けの授業を選択科目として受講した。また文化教育学部の指導教員や留学生センターのコーディネーターとともに、佐賀方言についての研究を進めた。また、茶道体験やガタリンピックなど、さまざまな留学生センター主催のイベントや地域のイベントへ参加した。その他、受講科目の相談や日本生活全般にわたる相談に、担当の留学生センター教員が応じた。

本年度の日研生は、留学成果をISCニュースへ寄稿した。

本学の日研生プログラムへの参加者を継続的に確保するために、どのような方策がありえるのか、留学生センター内で議論が行われている。

3. 他の教育サービス：

1) 留学生引率研修旅行等：

日本語や日本文化により深く接し、留学生相互の交流を深めるための引率旅行には、
1) 主に、留学生センターが開講／運営しているプログラムの学生を対象にしたものと、
2) 全学の留学生を対象とした見学旅行がある。

1) は下表のとおり実施した。実施後にアンケートを行い、学生の意見を聞いたところ、留学生間の交流が促進されたという評価を得た。

2) としては、2泊3日の沖縄方面への見学旅行が2月に行われ、留学生35名、引率教員1名、交流促進と引率補助のための日本人学生が4名参加した。男女別、出身国の偏りがないよう組まれたグループ（日本人学生一人含む）に分かれて見学を行った。学生たちの反応はよく、日本文化への理解や学生同士の交流が深まったと考えられる。

2009（平成21）年度	
4月24日（土）	日本語研修コース・短期留学プログラム学外実地研修（唐津市・福岡市）引率者：古賀、丹羽

5月 22日 (土)	鹿島高校と留学生の交流会、鹿島市ホームステイ、鹿島ガタリンピック参加 (鹿島ガタリンピック実行委員会主催) (23日まで) 引率者：古賀
7月 3日 (土)	日本語研修コース・短期留学プログラム学外実地研修 (小城市) 引率者：古賀、丹羽
11月 17日 (火)	日本語研修コース・短期留学プログラム学外実地研修 (伊万里市・吉野ヶ里遺跡) 引率者：古賀、丹羽
2月 5日 (金)	日本語研修コース・短期留学プログラム学外実地研修 (小城市) 引率者：古賀、丹羽
2月 17日 (水)	外国人留学生見学旅行 (沖縄) (19日まで) 引率者：吉川

2) 北海道留学生・日本人学生スタディ・ツアー

平成 22 年度からの新企画として、日本人学生と留学生の相互理解と交流を深めるために、スタディ・ツアーが企画・実施された。HP 上や掲示板で参加者の募集を行い、非常に多くの応募があった。スタディ・ツアー担当者 (山田) は面接や作文などを使って参加者の選抜を行い、結果、留学生 20 人、日本人学生 5 名が参加した。

参加者は 12 月初旬から、グループごとに 4 回以上の会合を持ち、北海道の事情について、各グループごとに学習を深め、ツアー参加前に発表会を持った。

北海道へは平成 23 年 2 月 22 日 (火) ~24 日 (木) まで、道南を主にまわる日程が組まれた。

本スタディ・ツアーは、昨年度まで関西方面で行っていた見学旅行の発展形として、グループでの学習を通して、継続的に留学生・日本人学生が交流を行うことで、従来の見学旅行にはない質の高い交流があった。参加した学生たちの反応も非常に良かった。

3) 留学生センターホームページ：

情報の迅速な伝達、センターの広報活動のために、留学生センターのホームページが日本語と英語の二言語で開設されていたが (<http://www.isc.saga-u.ac.jp/>)、システムを含めて一新し、中国語と韓国語を加え、四言語で開設された。

また、新着情報はこれまで一人の教員しかアップロードできなかったが、システムの改善により、国際課やアクセス権をもつ教員もアップロードできるようになり、従来より迅速に情報が伝達できるようになるとともに、担当教員への加重的負担が軽減されるシステムとなった。

内容は、センター長のメッセージや、専任教員のリストと自己紹介、国際課の職員のリスト、学生作成の短プロ (SPACE) の宣伝動画などが閲覧できるほかに、「日本語プログラム受講案内」(日本語版・英語版) や「受講申し込みの手続き」(日本語版・英語版)、

「SPACE 募集要項・願書様式」(PDF 版・MSWord 版)、文化教育学部、工学系研究科、農学部の教員リスト、特別聴講外国人学生用の願書のダウンロード、留学生のためのホームステイ事業案内、アパート・寮、佐賀での生活情報、佐賀大学への入学情報など、様々な情報が見られる。さらに、佐賀大学の学生(日本人向け)で海外留学に関心のある人のための情報もある。ホームページのトップページには、留学センター発行物の紀要やセンターニュースへのリンクがはられている。

HP の表紙写真は以下：



4) 留学生交流室

日本人学生と留学生の交流を目的とした留学生交流室を設置している。平成 21 年 12 月に移転した新しい留学生交流室には、コンピューター端末、テレビセット、ミーティングテーブルなどを設置、また、日本語・日本文化に関する刊行物や、英語や日本語の一般雑誌、文学、歴史など多分野の和洋書を配架したこともあり、多くの留学生と日本人学生が交流の場として利用している。

また、HP や掲示板で交流室の存在を広く周知した。

日本語と英語で要望書をつくり、常時学生が要望を伝えられるようにした。

また、来室者は、ノートに記名するようにしていたが、多くの学生は記名しないまま利用していた。観察する限り、この部屋を利用して、日本人学生や留学生の交流が活発に行われていた。その内容は、日本語学習の支援のみならず、留学生から日本人学生への外国語の指導、日本や外国の情報交換などであった。12月から1月にかけては、日本人学生が中心となり、ビデオ鑑賞会も行われた。

なお、コンピューター端末のメンテナンスは教員が行っている。

5) 留学報告会

海外の協定校に留学し、2009年11月から2010年10月までに帰国した日本人学生の有志による留学報告会が10月に行われた。留学の成果を報告するとともに、今後留学したいと考えている日本人学生たちに、体験を伝えてもらうのが趣旨である。担当者は帰国日本人学生に連絡をとり、留学報告会への参加を呼びかけ、参加する意思を示してくれた日本人学生と、ミーティングをもった。また、担当者は、会場を確保し、HP上や掲示板などで一般学生へ会の開催を周知した。

本年は、より多くの参加者を得るために大学会館の1階談話室で実施し、国際課による、留学手続きについての説明も同時に行うようにした。当日は、ハノイ国家大学（ベトナム）、オルレアン大学（フランス）、国立中興大学（台湾）に留学した学生3名が、それぞれの体験を、パワーポイントを使って報告した。さらに、過去に留学した学生たちのブースを設けて、これから留学を考えている学生の質問に直接答えるQ&Aの時間も設けた（6大学）。今後、留学を考えている学生たちの参加が多かった（アンケート記入者は12名だったが、それ以外にも参加があった）。報告会の後、アンケート調査を行い、報告会実施時期、報告内容などについて参加者の意見を聞いた。直接、留学体験者からの話が聞ける有益な会であったという報告が多かった。今後、さらに参加者を増やすためにも、直接学生派遣に携わっている教員に関与してもらうことも考えなければならない。

(分析結果とその根拠理由)

分析1：カリキュラムに微調整を加え、より効果的な日本語コースが提供されている。

根拠：昨年度のカリキュラム改革によって、コースの重複や無駄がなくなったが、受講者数のばらつきがあった。そのため、学期ごとに人数の少ないクラスを見直し、科目を変更するなど、微調整を行った。

さらに、オリエンテーションについても、工夫を加え、コース受講者を一教室に集めるのではなく、レベル別に教室を分けるなど、課題であったオリエンテーションにも工夫が加えられた。

分析 2：日本語教育でのノウ・ハウを日本人学生にも提供する工夫が引き続きなされている。

根拠：従来から、留学生センター教員は、文化教育学部の授業や教養教育の授業を担当していたが、それは専門に関することであった。しかし、今年度も、日本語コースの上級クラスを日本人学生にも開放することによって、発表の仕方、レポートの書き方など、日本語教育学が得意としてきたアカデミックスキル養成を日本人学生にも提供することができた。「アカデミック・プレゼンテーション」は、第1分野の主題科目として、日本人学生にも単位が取れる科目として提供されたことは、特筆に価する。

分析 3：日本人学生と留学生の交流が盛んになるような工夫が、引き続きなされている。

根拠：唐津・福岡実地研修、伊万里・吉野ヶ里実地研修、沖縄旅行などには、日本人学生が引率補助と交流促進という名目で参加し、研修・旅行を機会に留学生と交流している。また、留学生交流室では、国際交流に関心のある日本人学生と外国人学生や留学生が集まって、宿題をしたり、話したりしている。

北海道スタディツアーでは、日本人学生と留学生の交流をさらに促進させるために、従来以上に、旅行以前から交流できるように、留学生と日本人学生が同じグループで、北海道について調査し発表するなど、単なる旅行を越えて、交流を深めるための工夫が行われている。また、日本語の授業の中でも留学生と日本人学生がともに学ぶための「アカデミック・ジャパニーズ」や、留学生用の授業に日本人学生を招いてのビジターセッションなど、さまざまな交流促進のための試みが継続されている。

分析 4：国内外への情報発信が多言語化され、大幅に改善されている。

根拠：改訂された留学生センターのHPでは、中国語と韓国語を加えた4言語で佐賀大学の紹介が行われるようになった。また、新着情報が次々に掲載され、これまでは掲示板のみで知らせていた佐賀大学の日本人学生のための情報と留学生のための情報がHP上で瞬時に見られる。日本語の受講生のための情報も随時、更新されている。これは情報提供という点で大きな発展だろうと考えられる。

分析 5：短プロ（SPACE）の農学部における研究内容付き研究者リストの公開をほかの学部でもできないか検討している。

根拠：昨年度から、短プロ（SPACE）の農学部受け入れを希望する応募者数が増加している。これは、研究内容付きの研究者のリストの公開によるところが大きい。他学部でも同様なことができないか、運営委員会で審議している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

日本語コース・科目の改革が単年度に終わらず、さらに改善を続けていることは、大いに評価される。昨年度の問題であった履修手続きにおける混乱は、日本語オリエンテーションに工夫を凝らすことで、かなり問題は緩和された。さらに、各科目やコースで、アンケートを使って、授業内容の改善を担当教員が行って、より内容的に改善されている。

また、留学生センターのHPの改訂によるHPの多言語化で、様々な国の外国人学生へ、情報提供が幅広く行われるようになったことも、評価できる。また、留学生センター教員が、留学生のみならず、日本人学生へもアカデミックスキル養成の授業を引き続き提供し続けていることは評価できる。さらに、ビジターセッションに加えて、スタディツアーなどが新たに行われ、留学生と日本人学生の交流を促進する工夫が維持されている。また、留学報告会やHPでの情報提供を通じて、これから留学を考えている日本人学生に対するサービスも適正に維持されている。

(改善を要する点)

1. 日本語教育：初級から初中級までの6コマ1コースの集中コース（本編）については、日本語習得を主目的として留学している短プロ（SPACE）の学生にはいいコースであるが、理工・農の特別コースなどの大学院の学生には、宿題等の負担が多く、専門研究と並行して行うのは負担が重過ぎるようである。彼らにも受講しやすい受講システムやコースの新設が必要だろう。

2. 短プロ（SPACE）：学部の教員とその研究内容のリストは、短プロ（SPACE）における農学部の応募者数の増加や農学部の留学生センター運営委員からの報告からわかるように、いい効果を及ぼしている。他学部でもこれに倣って、学部の教員とその研究内容のリストの公開等を積極的に目指すべきであろう。

3. 日本語の履修手続きは、国際課職員の協力のもとに行われ、受講者の登録手続きは教員が行っているというのが実状であり、国際課職員及び担当教員にとっては過大な負担となっている。いずれは、学部や教養教育・全学教育科目と同じように、機械化されるべきであろう。その際、研究生の身分でも、履修できるように特別な配慮が必要となるであろう。

(3) 選択的評価基準Bの自己評価

日本語教育カリキュラムは、改善点が認められるものの、全体としてはいい方向に向

かっている。短プロ（SPACE）は順調に進んでおり、さらに、日本語・日本文化研修生の受け入れについて文化教育学部との協力が深まったことにより、留学生センター開講の各プログラム運営は、順調であると考えられる。教育サービスである留学生交流室の留学生と日本人学生への開放とホームページの充実が格段に進み、良好である。これらことから、本センターの正規学生以外の学生への教育は、充実し、前進しているといえよう。

(2) 研究の領域

ア 教員及び教育支援者に関する事項

(1) 観点ごとの分析

観点 3-3-1：教育の目的を達成するための基礎として、教育内容等と関連する研究活動が行われているか

(観点に係わる状況)

留学生センター教員の主たる教育内容は、留学生に対する「日本語学習支援」並びに「生活支援」であるが、今年度の教員の業績は「日本語学習支援」の分野に含まれ、以下のように分類可能である。(分類に用いられる番号は、別紙[センター教員の研究状況]と対応している。以下、同様である)

1. 日本語学習支援に関わるもの
 - a. 指導法
3、 11、 24、 25、 29、 30
 - b. 教材開発
7、 24、 27
 - c. 学習環境
28
 - d. 学習内容
18、 19、 20、 21、 22、 23、 31、 32、 33、 34
 - e. 教育支援者の育成
1、 2、 6、 8、 14、 15、 16、 28
 - f. その他
4、 5、 9、 10、 12、 13、 17
2. 生活支援に関わるもの
なし

(分析結果と、その根拠理由)

上掲のデータが示すとおり、「目的の達成状況はおおむね良好である」と考えられる。

イ 選択的評価基準A 研究活動の状況に関する事項

A-1 大学の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能していること。

観点 A-1-①：研究の実施体制及び支援・推進体制が適切に整備され、機能しているか。（該当なし）

観点 A-1-②：研究活動に関する施策が適切に定められ、実施されているか（該当なし）

観点 A-1-③：研究活動の質の向上のために、研究活動の状況を把握し、問題点等を改善するためのシステムが適切に整備され、機能しているか（該当なし）

A-2 大学の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっていること

観点 A-2-①：研究活動の実施状況から判断して、研究活動が活発に行われているか。

（観点到に係わる状況）

上掲の項目別に分類すると、以下のようになる。

1. 研究出版物

著書

1、 2、 18

審査論文

なし

論文（審査なし）

3、 4、 19、 24、 27、 29、 31、 32

報告書

なし

その他

5

2. 研究発表

9、 10、 11、 20、 22、 23、 25、 28、 30、 33、 34

3. 特許

なし

4. その他の成果物の公開

12、 13、 14、 15、 16、 17

5. 国内外の大学・研究機関との共同研究

6、 7、 8、 21、 26

6. 地域との連携

なし

7. 競争的研究資金への応募

6、 7、 8、 21、 26

(分析結果と、その根拠理由)

上掲のデータに基づけば、「目的の達成状況はおおむね良好である」と考えられる。現在 7 名の専任教員の存在を考えると、上記の数字は特に多いとは言えないのが事実であろう。日本語学・日本語教育学などの研究分野では研究プロセス自体にかかる時間が長いことが数字の少なさの原因となっていることを鑑み、「おおむね良好」との判断を下すに至ったが、今後はさらに活発な研究活動が望まれる。特に、著書や審査論文の形で、研究成果をこれまで以上に公にすることが求められるであろう。

観点 A-2-②: 研究活動の成果の質を示す実績から判断して、研究の質が確保されているか。

(観点に係わる状況)

教員の研究業績の中で、上掲の項目で該当するのが、「競争的研究資金の獲得状況」である。獲得した競争的資金に該当するのは、教員業績の「6」「21」(研究代表者として)および「7」「8」「26」(研究分担者として)である。他の項目「外部評価」「研究プロジェクト等の評価」「受賞状況」などに関しては、特に該当なし。

(分析結果と、その根拠理由)

「日本語学習支援」並びに「生活支援」を主たる業務としていることを鑑み、「目的の達成状況がおおむね良好である」との判断を下すに至ったが、今後はさらに質の高い研究活動が望まれる。上掲の「実績」項目のうち、センター教員にとって実現の可能性が最も高いと考えられる「競争的研究資金」への、これまで以上の積極的な応募が必要だと思われる。

観点 A-2-③: 社会・経済・文化の領域における研究成果の活用状況や、関連組織・団体からの評価から判断して、社会・経済・文化の発展に資する研究が行われているか。

(観点に係わる状況)

留学生センター教員の研究内容は、その分野の性質上、特に「社会」そして「文化」の発展に資する研究であると考えられるのであるが、その成果の「活用状況」に関するデータや、「関連組織・団体からの評価」に関するデータが得られていないため、判断が困難である。外部評価の導入などにより、より客観的な判断が可能になるとと思われる。

(分析結果と、その根拠理由)

上記の理由により、目的の達成状況に関する判断は困難である。

[別紙資料]

ウ 平成22年度の留学生センター教員の研究状況

[年度計画]

海外も含め、学外の研究会、学会などで研究発表を行う。

[年度末の進捗状況]

今年度の活動としては、海外の学会・研究会における発表は3件（フランス1件、台湾2件）、国内での学会・研究会発表は9件であった。その発表題目、学会名など詳細については、毎年度末に発行するセンター紀要に掲載している。

[各教員の研究業績] (1、2、3…の番号は、自己点検評価で使用する通し番号)

横溝 紳一郎

著書

1. 横溝紳一郎編著、大津由紀雄・柳瀬陽介著、田尻悟郎監修『生徒の心に火をつけるー英語教師田尻悟郎の挑戦ー』教育出版、1-207、212-240、246-293頁(2010.5)
2. 「教師研究ー教師の成長を支援する研修デザイナーー」西原鈴子編『シリーズ朝倉<言語の可能性>第8巻ー言語と社会・教育ー』朝倉書店、169-192頁(2010.5)

論文

3. 「コミュニケーション・スキルの訓練プログラムを応用した日本語授業」『佐賀大学留学生センター紀要』第9号、50-63頁(2010.3)
4. 「日本語教育に求められる実践研究とは何か」『日本語教育論集』第25号、52-70頁(石黒広昭氏・斎藤ひろみ氏他10名との座談会を収録)(2011.1)

雑誌記事

5. 「教師開眼物語！私が腕を上げたとき」『月刊日本語』1月号、16頁(2011.1)

共同研究

6. 科学研究費補助金 基盤研究(C) 「小中連携の英語教育における教員間の『協働性』に関する総合的研究」平成22~24年度 研究代表者 横溝紳一郎
7. 科学研究費補助金 基盤研究(C) 「小学校高学年外国語活動における『言語文化理解教育』を促進する教材開発」平成22~24年度 研究代表者 清ルミ
8. 科学研究費補助金 基盤研究(C) 「第二言語教育に特化した教師ナラティブ研究の理論

的・実証的展開」平成 21～23 年度 研究代表者 柳瀬陽介

口頭発表

9. 「小学校高学年対象の英語教育活動で、日本語教師は何かできるのか」日本語教育学会九州・沖縄地区研究集会（佐賀大学）（2010. 6）
10. 「日本語、国語、外国語教育の連携・協働と言語教育の将来について展望する」平成 22 年度日本語教育学会秋季大会、野山広氏・井上一郎氏・菅正隆氏・大津由紀雄氏との共同発表（神戸大学）（2010. 10）
11. 「小中連携の英語教育に関する疑問点－3 年半のコーディネーター／アシスタントとしての体験から」西南学院大学英语指導力開発ワークショップ冬季セッション（西南学院大学）（2010. 12）

講演

12. 『「教育」という仕事』平成 22 年度博多中学校社会人講話、博多中学校（福岡市）（2010. 6）
13. 「外国語教育としての日本語教育に学ぶ」「教授法再考」「優れた英語教師に学ぶ」「授業分析」西南学院大学英语指導力開発ワークショップ夏季セッション、西南学院大学（福岡市）（2010. 8）
14. 「アクション・リサーチによる授業改善」平成 22 年度学力向上プロジェクト研修会、明石南高等学校（明石市）（2010. 9）
15. 「アクション・リサーチとメンターの役割」平成 22 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム研修、高知県教育センター（高知市）（2010. 12）
16. 「教師の役割再考」「授業観察ワークショップ」日本語教師学びと交流の会 in 岡山、岡山県天神山文化プラザ（岡山市）（2011. 1）
17. 「佐賀大学における日本語教育の過去・現在・未来」佐賀大学留学生センター開設 10 周年記念式典、佐賀大学（佐賀市）（2011. 1）

古賀 弘毅

著書

18. 『佐賀西部方言を「科学」しよう！：言語理論入門』、古賀弘毅、三恵社、120頁（2011. 3）

論文

19. Koga, Hiroki, `Consecutive occurrences of the tense expletive: in case of a “shorter” event-describing morpheme plus /s/’, 『佐賀大学留学生センター紀要』、第9号、1-14頁（2010. 3）

口頭発表

20. Koga, Hiroki and Ono Koji, 'Surface constraints on multiple occurrences of the tense expletive', International Workshop on Morphology and Formal Grammar, Université Paris IV-Sorbonne, (2010.7).

共同研究

21. 科学研究費補助金平成21年度交付（平成21年度～平成23年度予定） 基盤研究（C）「時制の無標形態素の連続生起、および、動詞の基底形に関する理論的・実証的研究」 課題番号：21520410 研究代表者：古賀弘毅.

研究会口頭発表

22. 「Surface constraints on multiple occurrences of the tense expletive」、同上科学研究費補助金研究に関する議論のため、慶応大学言語文化研究所 TANCREDI、Chris 教授とのマン・ツー・マン発表、(2010.6)、三島文化会館にて.
23. 「日本語とその一方言における接辞による語幹の形態論的選択」、人工頭脳工学研究会(2010.12)、佐賀大学理工学部にて.

フォード 丹羽 順子

共同研究

24. 「コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用」（科学研究費補助金 基盤研究（A） 課題番号 21242012）

論文

25. 「ロールプレイにおける学習者と教師のインターアクションを問い直すー「笑い」を手がかりにー」 2010 世界日語教育大会論文集（CD-Rom 版）

口頭発表

26. 「ロールプレイにおける学習者と教師のインターアクションを問い直すー「笑い」を手がかりにー」 2010 世界日語教育大会（台湾・国立政治大学）（2010.7）

共同研究

27. 「コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用」（科学研究費補助金 基盤研究（A） 課題番号 21242012）

中山 亜紀子

論文

28. 「言語学習者のライフストーリーをめぐっての覚書ー言語習得（使用）という複雑な現象」、『佐賀大学留学生センター紀要』、第9号、91-103頁（2010.3）

山田 智久

口頭発表

29. 「ARを振り返って ～ARにおける枠組みの必要性について～」 アクション・リサーチ全国大会、(TKP コンカード横浜カンファレンスセンター) (2010.10)

吉川 達

論文

30. 「予備教育における日本語学習者に求められる読解能力ーマレーシアマラヤ大学予備教育部の事例をもとにー」『山口国文』第34号（2011.03）

口頭発表

31. 「日本留学試験の模擬試験を利用した本試験結果予測の可能性」2010年度第8回日本語教育学会研究集会（鳴門教育大学）（2010.11）

下條 正純

論文

32. 「論述式答案に見る日本人大学生の日本語諸問題」、『佐賀大学留学生センター紀要』、第9号、47-49頁（2010.3）
33. 「少女小説における女性文末辞と人物描写」 2010世界日本語教育大会論文集（CD-Rom版）

口頭発表

34. 「少女小説における女性文末辞と人物描写」 2010世界日本語教育大会（台湾・政治大学）（2010.7）
35. 「日本語教育における小説利用の意義と実践」全国語学教育学会第36回年次国際大会、坂井美恵子氏との共同発表（愛知県産業労働センター）（2010.11）

(3) 学生支援の領域

基準 7 学生支援等

ア 教育に関する事項(留学生の修学/日本人学生の留学/留学生と日本人学生の交流等)

(1) 観点ごとの分析

基準 7-1 学習を進める上での履修指導が適切に行われていること。また、学生相談・助言体制等の学習支援が適切に行われていること。

観点 7-1-1 : 省略

観点 7-1-2 : 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

(観点に係る状況)

平成 22 年度は、表 1 のとおり相談時間を設け、担当時間の教員が研究室で待機した。また、設定されたこれらの時間以外にも、学生からの相談に対して柔軟に応じた。

表 1 平成 22 年度相談担当時間

	前学期	後学期
月		4 時限 丹羽
火	3 時限 古賀 4 時限 横溝	4 時限 横溝
水	5 時限 山田	5 時限 古賀・山田
木	2 時限 丹羽 3 時限 下條	3 時限 下條 5 時限 吉川
金	4 時限 中山	4 時限 中山

また、表 2 からわかるように、平成 22 年度に記録された留学生相手の相談 166 件中、半数近くの 73 件が留学生の日本語学習に関する相談であった。具体的には、日本語の関する質問のほかに、研究計画書などの日本語の添削、日本語能力試験対策、大学内外のコンテストに参加するための日本語チェックなど多様であった。修学の「他」として分類したものは、日本語クラスの受講相談、受講証明書の発行に関するもの、進路相談や、授業を欠席する際にはどうしたらいいかといった担当教員とのコミュニケーションについての相談もあった。

日本語に比べて相談件数は少ないが、「異文化交流」や「生活」に分類したものの中には、日本人との交流に関わる相談、新たに家族が来日することに関わる相談もみられ、留学生の相談のニーズの多様さがうかがえる。

一方、日本人学生の相談件数は、前年度に比べて2倍以上になっている。留学についての相談が減り、「生活」と「その他」に関するものが多かったことが特徴的である。これは、平成21年度後期から行った学内GPの「日本でアカデミック」や上級クラスの一部を教養教育の主題科目として提供したことにより、日本人学生との接触が増えたことが大きな要因と言える。さらに、これらの学生へ継続して丁寧な相談が行われたために、留学生センターの教員と日本人学生との接触が増えたと考えられる。

このように、留学生への修学相談から日本人学生への異文化交流に関する相談など広範囲の相談にあたり、柔軟なサービス提供に努めた。

表2 内容別相談件数

	修学		異文化交流	生活	他	計
	日本語	他				
留学生	日本語	他	17	17	16	166
	73	43				
日本人学生	留学	他	15	40	53	122
	6	8				

(分析結果とその根拠理由)

前学期、後学期ともに、相談の時間が分散するようにし、比較的学生の利用しやすい午後に設定して、留学生センターの専任教員が相談に応じる体制を敷いている。また、相談の多くを占める設定時間外の来訪にも柔軟に対応している。その結果、相談に訪れる学生も多く、学生にとって利用しやすい相談体制が整っているとと言える。

観点7-1-3：省略

観点7-1-4：特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあるか。また、必要に応じて学習支援が行われているか。

(観点に係る状況)

来日後一年以内の外国人留学生を対象として、彼らの学習・研究の促進、及び修学・

生活環境への早期適応を図るため、学生チューターを配置して、講義説明・研究実験指導を中心に、日本語指導、日常生活の世話等の課外指導やアドバイスをを行っている。チューターは、留学生の修学上のニーズや便宜に配慮し、多くは同じ研究室の学生等、学習・研究分野の共通する者の中から留学生指導教員が推薦する制度にしている。また、「チューターの手引き」を用意し、予めチューターに配布して、任務等の諸説明を行っている。

チューターの配置状況	平成 22 年前学期	50 名
	平成 22 年後学期	64 名

「チューターの手引き」の内容	<ul style="list-style-type: none">・チューター制度について・チューターの任務と心構え・チューター特別指導実施要領・問い合わせ先・関係書類提出先
----------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(分析結果とその根拠理由)

特別な支援が必要であると考えられる来日一年目の留学生に対して、修学上の必要性に配慮した学生チューターを配置するシステムが整っている。平成 22 年度は、例年通り多くのチューターが配置され、チューター制度の周知と利用が進んでいることが窺える。また、チューターの学生に対して、チューター活動に係るマニュアルとして配布する「チューターの手引き」も適宜改訂されており、総体的に制度は適正に機能している。

基準 7-2 学生の自主的学習を支援する環境が整備され、機能していること。また、学生の活動に対する支援が適切に行われていること。

観点 7-2-1：自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

(観点に係る状況)

平成 21 年 12 月より留学生センター教員の研究室に隣接する一室（総合研究棟 2 階）に「留学生交流室」を設置し、留学生の自習、交流の場として開放している。室内には、コンピュータ端末、テレビセット、ミーティングテーブル等を設置し、日本語・日本文化に関する刊行物など留学生向けの雑誌（例：『日本語ジャーナル』）をはじめ、文学、歴史など多分野の和書および洋書を配架している。午前 9 時から午後 5 時まで開放し、誰でも自由に利用することができる。平成 22 年度は利用者が徐々に増え、学生が自主的にビデオ上映会を行ったり、スタディーツアーのミーティングに利用したりと、利用の幅が広がっている。

(分析結果とその根拠理由)

留学生の自習や交流のために学生の利用しやすい棟内に部屋を確保して留学生交流室とし、備品や書籍を設置して学生の用に供している。また、平成 22 年度は、学生への認知度も上がり、利用学生が増えている。学生の自主的学習を支援する環境が整備され、有効に利用されていると言ってよい。

観点 7-2-2 : 省略

イ 生活に関する事項

基準 7-3 学生の生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。

観点 7-3-1 : 生活支援等に関する学生のニーズが適切に把握されており、健康、生活、進路、各種ハラスメント等に関する相談・助言体制が整備され、適切に行われているか。

(観点到に係る状況)

「観点 7-1-2」で記したとおり、前学期、後学期とも学生相談の時間を設定し、留学生及び日本人学生からの相談に専任教員全員が対応している。また、留学生の健康管理とサポートのため、必要に応じて保健管理センターと連携・協力する体制をとっている。

(分析結果とその根拠理由)

「観点 7-1-2」に記述したとおり、学生のための相談時間を設定して留学生センターの専任教員が相談に応じる体制が整備されており、学習支援のほかに、健康、生活、進路、ハラスメント（留学生センター留学生教育研究部門からは教員一名がハラスメント相談員になっている）等さまざまな相談に応じ、留学生のニーズの把握と対処に努めている。このほか、留学生のニーズは、日々国際課を訪れる多くの学生をとおして同課でよく把握され、彼らへのサポートがなされている。また、必要に応じて保健管理センターと共同して、留学生の健康管理を支援している。

観点 7-3-2 : 特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への生活支援等を適切に行うことのできる状況にあるか。また、必要に応じて生活支援等が行われているか。

(観点に係る状況)

新入外国人留学生を対象として、年に2回、4月と10月に「外国人留学生オリエンテーション」を行い、留学生生活等に関する説明を行っている。オリエンテーションの内容は次のとおりである。(別添「平成22年度春季外国人留学生オリエンテーション」「平成22年度秋季外国人留学生オリエンテーション」参照)

春季オリエンテーション(4月8日実施)の内容

- ・教職員の紹介
- ・佐賀警察署員による講演
 - ① 留学中における安全・安心の日常生活の確保について
 - ② 留学中の国内での交通安全について
- ・日本語教育について
- ・在留資格関係について
- ・奨学金について
- ・住居について
- ・留学生相談について
- ・その他の情報について

秋季オリエンテーション(10月1日実施)の内容

- ・教職員の紹介
- ・佐賀警察署員による講演
 - ① 留学中における安全・安心の日常生活の確保について
 - ② 留学中の国内での交通安全について
- ・日本語教育について
- ・在留資格関係について
- ・健康について
- ・奨学金、授業料免除について
- ・住居について
- ・交通事故について
- ・留学生相談について
- ・その他の情報について

(分析結果とその根拠理由)

日本での留学生活に必要な情報を提供し、支援システムを周知するために、新入留学生を対象にオリエンテーションを実施している。また、留学生の生活上の安全強化を図るための佐賀警察署員による講演を平成22年度も継続して行った。このほか、佐賀大学

留学生会長、佐賀市国際交流協会職員による説明などをおして、学生主体の活動や地域との交流行事など、多様な情報提供と案内を行っている。

観点 7-3-3：学生の経済面の援助が適切に行われているか。

(観点に係る状況)

奨学生等の選考について：

下記の奨学金等の受給者、受給候補者の選考を留学生センターで行っている。

- ・ 日本政府（文部科学省）奨学金
- ・ 留学生交流支援制度（短期受入れ）
- ・ 私費外国人留学生学習奨励費
- ・ 佐賀大学外国人留学生奨学金
- ・ 佐賀大学基金奨学金
- ・ 佐賀市留学生奨学金
- ・ 平和中島財団外国人留学生奨学金
- ・ ロータリー米山記念奨学会奨学金
- ・ 実吉奨学金
- ・ 朝鮮奨学金
- ・ ドコモ留学生奨学金
- ・ アシュラン奨学金
- ・ 日韓大学生交流事業（21世紀東アジア青少年大交流計画奨学金（韓国））
- ・ 木下記念和香奨学金
- ・ 佐川留学生奨学会佐川奨学金
- ・ アジア国際交流奨学財団川口静記念奨学金
- ・ サトー国際奨学財団奨学金
- ・ 清香奨学金

寄宿舎について：

佐賀大学の管理する寄宿舎に加え、NPO 法人国際下宿屋管理の宿舎等が外国人留学生の寄宿舎として利用されている。（別添「国際交流会館入居者選考基準」、「NPO 法人国際下宿屋 宿舎一覧」参照）

佐賀大学管理宿舎

国際交流会館	学生用 47 室（単身用 40、夫婦用 3、家族用 4） 寄宿料月額単身室 7,200 円、夫婦室 11,000 円、 家族室 13,500 円
楠葉寮	留学生募集人員 8 名（私費外国人留学生、男 5・女 3） 寄宿料月額 5,300 円（共益費込）

NPO 法人国際下宿屋管理宿舎

一之瀬寮	単身女性 9 名、部屋代 10,000 円、共益費 500 円
大坪寮	単身男性 7 名、部屋代 10,000 円、共益費 1,250 円
青風寮	単身男性 28 名、部屋代 10,000 円、共益費 1,000 円
三溝寮	単身女性 6 名、部屋代 10,000～13,000 円、共益費 200 円
ホワイトハイツ	単身女性 7 名、部屋代 17,000 円
栄寮	家族・友人 15 組、部屋代 21,800 円、共益費 2,000 円
江頭寮	夫婦 2 組 4 名、部屋代 30,000 円

その他

佐賀銀行末広寮	1 名、部屋代 3,000 円
---------	-----------------

（分析結果とその根拠理由）

留学生に安価で安全な滞在施設を提供すべく、本学の管理する国際交流会館、楠葉寮に加え、NPO 法人国際下宿屋管理の寄宿舎等を確保している。また、留学生センターでは、各種の奨学金受給者等の選考を厳正に行うとともに、経済援助を受けていない学生に国際交流会館への入居を優先的に割り当てるなど、可能な経済的支援が適切に配分される工夫がなされている。選考基準の改定など、必要な修正も適宜行って適正な経済支援制度を維持している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

（優れた点）

留学生及び日本人学生のための相談時間、新入留学生のためのオリエンテーション、来日一年目の留学生のためのチューター制度など、学生の修学や生活を支援する体制が整えられており、適切に機能している。

（改善を要する点）

留学生交流室の周知を留学生だけではなく、日本人学生にも進め、交流室を一つの国際交流の場とする。

(3) 基準7の自己評価の概要

新入外国人留学生が佐賀大学での修学と留学生生活を然るべく開始できるように、オリエンテーションを実施して、日本での修学と生活に必要な情報及び支援体制を周知している。また、渡日後一年以内の留学生支援のためにチューター制度を設け、修学・生活上のニーズに応えている。チューターに対しては、マニュアルを改訂して常に適正な指示に努めている。また、学生相談の時間を設けて専任教員が待機するとともに、設定時間の内外を問わず、留学生からの日本語学習や進路の相談、日本人学生からの留学相談など、様々な相談に柔軟に応じている。実際に相談件数も多く、学生にとって利用しやすい環境が提供されていることがうかがえる。自主的学習の支援としては、留学生交流室を設置し、図書・備品を置き、留学生の学習の用に供している。寄宿施設については、大学管理の寮のほか、NPO 法人管理の寄宿舎等を確保し、経済的負担の少ない住居の提供に努めている。また、大学寮の入居者選考では私費留学生を優先する等、経済的支援が留学生間に適切に配分されるよう配慮している。このような活動状況から、修学及び留学生生活に係る学生支援体制が適切に機能していると言える。

(4) 国際交流・社会貢献の領域

基準 国際交流

ア 教員および学生の国際交流に関する事項

基準 国際交流が活発に行われ、活動の成果が上がっていること。

(1) 観点ごとの分析

観点1 大学の目的に照らして、職員の国際交流が活発に行われており、活動の成果が上がっているか。

(観点到に係わる状況)

1. 教員の国際交流に関する実績

各教員の国際交流活動実績は以下のとおりである。

横溝紳一郎

2010. 7. 30-8. 2 台湾台北市の政治大学で開催された世界日本語教育大会に参加した。
2010. 9. 17-9. 26 台湾高雄市にある文藻外国語学院で開催された日本語教育実習の引率・指導を行った。
2010. 12. 2-12. 4 大韓民国ソウル市で、言語文化理解教育教材に関する調査を実施した。
2011. 2. 27-3. 2 台湾台北市・高雄市で、言語文化理解教育教材に関する調査を実施した。
2011. 3. 28-4. 5 アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市で開催された AAS/ATJ 2011 Conference に参加した。

古賀弘毅

2010. 7. 8-7. 10 7月8日から10日まで、17th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar, Paris university Paris Diderot、8日のWorkshop on Morphology and Formal Grammarを含む、に出席し、口頭発表を聴いた。8日に同ワークショップで、ポスター発表を行った。同ワークショップで、他の発表を聞いた。9日から10日まで、同学会で口頭発表を聞いた。発表者で、University of Hertfordshire's Science and Technology Research InstituteのAdaptive Systems Research GroupのITALK Projectでポスドクをしている日本人の研究者、佐藤陽氏と研究ネットワークを作った。

フォード丹羽順子

2010. 7. 31-8. 1 台湾・国立政治大学で開催された2010世界日本語教育大会に参加し、ポスター発表(「ロールプレイにおける学習者と教師のインターアク

ションを問い直すー「笑い」を手がかりにー)を行った。

下條正純

2010. 7. 31-8. 1 台湾・国立政治大学で開催された 2010 世界日本語教育大会に参加し、口頭発表（「少女小説における女性文末辞と人物描写」）を行った。

（分析結果とその根拠理由）

4名の教員が海外における学会に参加したり研究発表を行ったりしている。また、提携校における日本語教育実習を通して、交流を深めることができしており、教員の国際交流活動は活発に行われていると言えよう。教員の海外での国際交流活動実績については、『佐賀大学留学生センター紀要』に、毎年、年報として記載され報告されている。

観点2 大学の目的に照らして、学生の国際交流が活発に行われており、活動の成果が上まっているか。

（観点到に係わる状況）

2. 学生の国際交流に関する実績

2-1 短期留学プログラム

・短期留学プログラム（SPACE）

第9期（2009.10-2010.9）の応募者数は50名で、受け入れ学生数は21名であった。

一方、第10期（2010.10-2011.9）の応募者数は49名で、受け入れ学生数は20名であった。

・短期留学プログラム（一般）

4月入学の学生数は学部学生21名であった。また、5月に大学院学生1名が入学した。

10月入学は学部学生11名であった。

・日本語・日本文化研修プログラム

新たにベトナムから1名の参加があった。

2-2 海外語学研修、短期学生派遣プログラムおよび長期留学支援プログラム

海外語学研修、サマープログラム、短期学生派遣プログラムおよび長期留学支援プログラムによる派遣数は以下のとおりである。

・海外語学研修：18名

ラトローブ大学（オーストラリア）9名、パシフィック大学（アメリカ）9名

・サマープログラム：4名

木浦大学校（韓国）2名、釜慶大学校（韓国）2名

・短期学生派遣プログラム：26名

オルレアン大学（フランス）3名、イーストアングリア大学（イギリス）2名、ラトローブ大学（オーストラリア）2名、パシフィック大学（アメリカ）2名、釜慶大学校（韓国）1名、国民大学校（韓国）3名、漢陽大学校（韓国）1名、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）1名、ペラデニヤ大学（スリランカ）2名、華東師範大学（中国）2名、北京工業大学（中国）2名、北京理工大学（中国）1名、中興大学（台湾）1名、国立台北大学（台湾）1名、輔仁カトリック大学（台湾）1名、カセサート大学（タイ）1名

- ・長期留学支援プログラム：1名
オークランド大学（ニュージーランド）1名

2-3 海外留学の派遣地域および派遣数

大学間の学術交流協定校は平成21年度まで65校だったのが、平成22年度は新たに3校増え、派遣大学数は68校になった。一方、学部間の学術交流協定校も平成21年度まで66校であったが、平成22年度は1校増えて67校になった。

2-4 外国人留学生の地域国際交流行事への参加

22年度は、42の地域国際交流行事があった。そのうち、多くの外国人留学生が参加したのものとして、次の行事がある。

国際生け花教室（5/10～7/12）、新入留学生オリエンテーション&意見交換会（5/8）、地引き綱（7/17）、国際溪流滝登り in 七山（7/25）、栄の国まつり「総おどり」（8/1）、弘堂祭（10/16）、大名行列まつり（10/24）、スタンプラリー in 吉野ヶ里歴史公園（10/30）、小城市立幼稚園・保育園児とのふれあい会（11/1）、国際交流陶芸教室（11/7）、餅つき会（11/19）、佐賀市民との卓球・バドミントン交流会（12/12）、佐賀市留学生意見交換会（1/5）、お正月の遊び体験会（1/18）、国際交流フェスタ講師（2/20）、日本料理講座（2/11）。

その他、教員が留学生と一緒に参加し日本人との交流を促進支援したものとして、鹿島ガタリンピック（5/22～5/23）がある。鹿島ガタリンピックには、短期留学プログラム（SPACE）の学生19名と他の留学生約12名が参加した。大会の前日には、鹿島高校の高校生と交流会をもち、ホームステイをした。

また、中国人留学生は、毎年、中国春節パーティーを主催している。

（分析結果とその根拠理由）

短期留学プログラムによる受け入れ学生数、海外語学研修および短期・長期派遣プログラムによる日本人学生派遣数、さらに海外留学の派遣地域および派遣数に関しては、国際

課に記録がある。外国人留学生の地域国際交流行事への参加に関しても、国際課に記録がある。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

教員の国際交流に関しては、海外の学会への参加および研究発表が計5件行われている。

昨年度、台湾高雄市にある文藻外国語学院と佐賀大学間の学術交流協定書の締結が行われたが、同学院において日本語教育実習が引き続き行われている。

以上の点から、教員の国際交流は活発に行われていると言える。

一方、学生の国際交流については、短期留学プログラム（SPACE）は定員20名に対し50名の応募があること、また、同じ大学からの応募が継続してあることから、プログラムが評価されていると言ってよいであろう。また、日本語・日本文化研修プログラムにはじめてベトナムから1名の参加があった。

本学の学生の海外留学については、派遣地域・数は大学間の学術交流協定校が68校、学部間の学術交流協定校が67校ある。これは、九州の他大学と比較すると、熊本大学の場合、大学間交流協定校55校、学部間学術交流協定校67校、鹿児島大学の場合、大学間交流協定校49校、学部間学術交流協定校37校となっており、佐賀大学は多いと言えよう。実際の日本人学生の派遣について見ると、海外語学研修参加者数18名、サマープログラム参加者数4名、短期学生派遣プログラム26名、長期学生派遣プログラム1名である。なかでも短期学生派遣プログラムの26名は、昨年度17名であったことを考えると、留学生数は大幅に増加していると言える。

また、留学生の地域国際交流行事への参加は多く、国際交流はうまくいっていると言えよう。

(改善を要する点)

日本語・日本文化研修プログラムにはじめての参加があったが、継続して受け入れていけるよう、情報提供を行っていききたい。

基準 社会貢献

イ 教育および研究における社会連携・貢献に関する事項

基準 教育および研究において社会連携・貢献が活発になされ、活動の成果が上がっていること。

(1) 観点ごとの分析

観点 大学の目的に照らして、教育および研究における社会連携・貢献が活発になされて

おり、活動の成果が上がっているか。

(観点に係わる状況)

1. 教育における社会連携・貢献に関する実績

各教員の教育における社会連携・貢献に関する活動実績は以下のとおりである。

横溝紳一郎

九州日本語教育連絡協議会の事務局長を2006年6月より務める。

フォード丹羽順子

九州日本語教育連絡協議会の佐賀地区委員を2007年4月より務める。

山田智久

九州日本語教育連絡協議会の委員を2009年4月より務める。

2. 研究における社会連携・貢献に関する実績

各教員の研究における社会連携・貢献に関する活動実績は以下のとおりである。

横溝紳一郎

- 2010.6 「小学校高学年対象の英語教育活動で、日本語教師は何ができるのか」日本語教育学会九州・沖縄地区研究集会（佐賀大学）
- 2010.10 「日本語、国語、外国語教育の連携・協働と言語教育の将来について展望する」平成22年度日本語教育学会秋季大会、野山広氏・井上一郎氏・菅正隆氏・大津由紀雄氏との共同発表（神戸大学）
- 2010.12 「小中連携の英語教育に関する疑問点ー3年半のコーディネーター／アシスタントとしての体験から」西南学院大学英语指導力開発ワークショップ冬季セッション（西南学院大学）
- 2010.6 『教育』という仕事」平成22年度博多中学校社会人講話、博多中学校（福岡市）
- 2010.8 「外国語教育としての日本語教育に学ぶ」「教授法再考」「優れた英語教師に学ぶ」「授業分析」西南学院大学英语指導力開発ワークショップ夏季セッション、西南学院大学（福岡市）
- 2010.9 「アクション・リサーチによる授業改善」平成22年度学力向上プロジェクト研修会、明石南高等学校（明石市）
- 2010.12 「アクション・リサーチとメンターの役割」平成22年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム研修、高知県教育センター（高知市）
- 2011.1 「教師の役割再考」「授業観察ワークショップ」日本語教師学びと交流の会 in 岡山、岡山県天神山文化プラザ（岡山市）

2011.1 「佐賀大学における日本語教育の過去・現在・未来」佐賀大学留学生センター開設 10 周年記念式典、佐賀大学（佐賀市）

古賀弘毅

2010.6 「Surface constraints on multiple occurrences of the tense expletive」、同上科学研究費補助金研究に関する議論のため、慶応大学言語文化研究所 TANCREDI, Chris 教授とのマン・ツー・マン発表（三島文化会館）

2010.12 「日本語とその一方言における接辞による語幹の形態論的選択」、人工頭脳工学研究会（佐賀大学理工学部）

下條正純

2010.11 「日本語教育における小説利用の意義と実践」全国語学教育学会第 36 回年次国際大会、坂井美恵子氏との共同発表（愛知県産業労働センター）

山田智久

2010.10 「AR を振り返って ～AR における枠組みの必要性について～」アクション・リサーチ全国大会、(TKP コンカード横浜カンファレンスセンター)

吉川達

2010.11 「日本留学試験の模擬試験を利用した本試験結果予測の可能性」2010 年度第 8 回日本語教育学会研究集会（鳴門教育大学）

(分析結果とその根拠理由)

教員の研究における社会連携・貢献の実績については、『佐賀大学留学生センター紀要』に、毎年、年報として記載され報告されている。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

九州地区における日本語教育の発展のために、連絡協議会の事務局長および（佐賀地区）委員を 3 名の教員が担っている。また、研究における社会貢献は 14 件あり、活発な活動をしていると言ってよいだろう。

(5) 組織運営の領域

基準 11 管理運営

ア 管理運営に関する事項

基準 11-1 センターの目的を達成するために必要な管理運営体制及び事務組織が整備され、機能していること。

(1) 観点ごとの分析

観点 11-1-1:管理運営のための組織及び事務組織が、センターの目的の達成にむけて支援するという任務を果たす上で、適切な機能を持っているか。また、必要な職員が配置されているか。

(観点に係わる状況)

留学生センターは平成12年4月に文部科学省の省令施設として設置された。平成14年の大学法人化に伴い管理運営のための組織は理事2名とセンター長1名があたることとなった。事務は平成17年度に旧の留学生課と国際課が統合され国際課(職員6名、事務補佐員3名、国際アソシエイト1名)となり、学術研究協力部長が国際課を統括することとなった。国際課では留学生センターに関する業務と国際貢献推進室の国際交流に関する業務を担当している。このうち留学生関係業務の多くは教務事項であり、教務課と国際課の連絡を従前と同じように密にする必要がある。

(分析結果とその根拠理由)

学長をトップに、研究・国際貢献担当理事、教育・学生担当理事、国際貢献推進室長、留学生センター長、学術研究協力部長、国際課長が管理運営の事務組織である。大学における組織図参照。

観点 11-1-2:留学生センターの目的を達成するために、効果的な意思決定が行える組織となっているか。

(観点に係わる状況)

留学生は教育を受けている外国人であるので、教育と国際性との二面性を有している。従って留学生センター長は、教育・学生担当理事と研究・国際貢献担当理事と協議の上、管理運営事項を決定している。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センターは所属教員を有する全学共同教育研究施設であり、留学生の日本語教育と生活支援及び日本人学生の海外派遣を主に担当している。学術交流協定の締結や国際交流に係わることは国際貢献推進室が担当する。国際課はその両方の組織の事務を担当する。国際貢献推進室と留学生センターの業務を明確にする必要がある。

佐賀大学留学生センター規則、国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置要項参照。

観点 11-1-3: 学生、教員、事務職員等、そのほかの学外関係者のニーズを把握し、適切な形で管理運営に反映されているか。

(観点到係わる状況)

留学生センター運営委員会、人事選考委員会、佐賀地域留学生等交流推進協議会及びセンター教員会議で教員、事務組織、学外関係者からのニーズの把握がなされている。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センター運営委員会は各学部から選出された運営委員(各2名、10名)とセンター教員(14名、日本語教育研究部門6名、英語教育部門8名(ネイティブ英語教員5名、併人3名)及び学部の留学生専門担当教員(4名)、及びセンター長から構成されている。当運営委員会は管理運営について審議している。佐賀県地域留学生等交流推進協議会では学長、教育担当理事、佐賀県はじめ市町村、各種国際交流団体から構成され、留学生に関する意見を自由に聴くことができる。

観点 11-1-4: 省略

観点 11-1-5: 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に係わる職員の資質の向上のための取り組みが組織的に行われているか。

(観点到係わる状況)

文部科学省などの通知に基づいて大学で研修が実施されている。更に、日本学生支援機構あるいは各大学が開催する留学生の受け入れ等に係わる説明会や会議に教員及び事務職員は参加している。

基準 11-2 管理運営に関する方針が明確に定められ、各構成員の責務と権限が明確に示されていること。

基準 11-2-1: 管理運営に関する方針が明確に定められ、その方針に基づき、学内の諸規定が整備されるとともに、管理運営に係わる役員の選考、採用に関する規定や方針、及び各

構成員の責務と権限が文書として明確に示されているか。

(観点に係わる状況)

佐賀大学留学生センター規則に留学生センター長の責務が明示されている。更に、佐賀大学留学生センター長及び副センター選考規程により留学生センター長の選出方法が学内に周知されている。

(分析結果とその根拠理由)

佐賀大学留学生センター規則、佐賀大学留学生センター長及び副センター長選考規程参照、

基準 11-2-2: 適切な意思決定を行うために使用される大学の目的、計画、活動状況に関するデータや情報が蓄積されているとともに、大学の構成員が必要に応じてアクセスできるようなシステムが構築され、機能しているか。

(観点に係わる状況)

留学生センターの目的、計画、活動状況に関する情報は留学生センターホームページに掲載されている。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センターホームページ参照。留学生センターの業務は、「佐賀大学留学生センター紀要」に毎年年報として記載され報告されている。

基準 11-3 大学の目的を達成するために、大学の活動の総合的な状況に関する自己点検・評価がおこなわれ、その結果が公表されていること。

観点 11-3-1: 大学の活動の総合的な状況について、根拠となる資料やデータに基づいて、自己点検・評価（現状・問題点の把握、改善点の指摘等）を適切に実施できる体制が整備され、機能しているか。

(観点に係わる状況)

中期目標・計画を3ヶ月毎月に実施し、更に毎年まとめて実施している。

(分析結果とその根拠理由)

中期目標・計画に関して平成16、17年度では初期段階であったので「検討する」や「図る」などの項目が多かったが、平成18年度以降は具体的な記述とした。

観点 11-3-2: 自己点検・評価の結果が大学内及び社会に対して広く公表されているか。

(観点に係わる状況)

教員の個人評価は平成16～21年度分を実施し、平成16～21年度の留学生センターの自己点検評価報告書は佐賀大学のホームページで公表されている。

(分析結果とその根拠理由)

佐賀大学ホームページ参照 <http://www.saga-u.ac.jp/>

観点 11-3-3: 自己点検・評価の結果について外部者(当該大学の教職員以外の者)によって検証する体制が整備され、実施されているか。

(観点に係わる状況)

平成16年度から外部者によって検証される体制が確立された。

(分析結果とその根拠理由)

平成16年度から毎年の自己点検評価活動報告書の外部評価を受けている。最近では、平成20年1月(佐賀大学元学長・佐古宣道氏)、平成21年3月(長崎大学副学長・小路武彦氏)、平成22年3月(佐賀大学元学長・佐古宣道氏)、平成23年2月(佐賀大学元学長・佐古宣道氏)にそれぞれ受けた。平成22年度分も受ける計画である。

観点 11-3-4: 評価結果が、フィードバックされ、大学の目的の達成のための改善に結びつけられるようなシステムが整備され、機能しているか。

(観点に係わる状況)

外部評価を受け改善するシステムはできている。

(分析結果とその根拠理由)

平成16～21年度の自己点検評価は外部者による評価を受け、その評価結果を一部フィードバックした。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

留学生センター運営委員会はネイティブ英語教員も含めて、留学生センターの運営・企

画・人事等を審議し決定し、その結果は留学生センター教員、各学部の委員、事務職員に周知している。更に、議事録は各学部の委員を通して学部構成員に配信され公表されている。

(改善を要する点)

交流協定締結は殆ど国際貢献推進室によって進められ、交流協定の状況は、留学生センターへは後日連絡にとどまっている。留学生センターは、在学中の留学生の日本語教育と生活の指導にとどまらず、これからは国際的な視野を見据えた留学生教育や日本人学生の派遣に重くべきだと思われる。これから留学生センターと国際貢献推進室は、国際交流センター（仮称）に組織替えし、一体となった活動をする予定であるが国際交流に関する事業の応募や概算要求事項、学長裁量経費申請などで積極的に進んでいく必要がある。

(3) 基準 11 の自己評価の概要

法人化後、留学生センターの運営は留学生センター運営委員会で審議決定されるので、決定事項などは学内に十分公表される組織である。留学生センターにかかわる組織は学長、理事（研究・国際貢献担当理事、教育・学生担当理事）、国際貢献推進室長、留学生センター長の系列のほかに、留学生センター及び留学生に係わる事務組織は両理事、学術研究協力部長、国際課長の系列となっている。縦の系統以外の横の学務部長（学務部）と学術研究協力部長、教務課長と国際課長との連携を十分に維持する必要がある。留学生センターの活動はセンターニュースや留学生報告などで公表し、更には地元新聞による報道で学内外に知られるようになった。また、外部評価を受け改善に役立てることができた。

留学生センターは国際性を帯びた学生の教育であるが、外国での協定締結や交流促進は国際貢献担当理事と国際貢献推進室が実施し、それに基づく留学生教育とその対応は教育担当理事と留学生センター長が担うようになっている。国際交流が協定の締結だけに終わらず、実質的な外国人留学生の受け入れ・教育と日本人学生の海外派遣による国際的人材の育成によって、大学の根幹である「学生教育」を主とした国際化を一層推進する必要がある。

イ その他組織運営に関する事項

基準 2 教育研究組織（実施体制）

(1) 観点ごとの分析

基準 2-1 大学の教育研究に係わる基本的な組織構成（学部及び学科、研究科及びその専攻、

その他の組織並びに教養教育の実施体制)が大学の目的に照らして適切なものであること。

観点 2-1-1 ～ 観点 2-1-6 省略

観点 2-1-7: 全学的なセンターなどを設置している場合には、その構成が教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

(観点到係わる状況)

留学生センターの設置目的に照らして留学生のための、①日本語教育、②修学及び生活相談、③地域社会との交流、④日本人学生のための海外留学支援、⑤帰国留学生のフォローアップ等を促進するために、平成22年度は7名の日本語専任教員が配置されている。更に、日本人学生の英語力を向上させ、外国留学するために必要な英語力をつけさせるために、5名のネイティブ英語教員を学内運用定員で3年の期限付きで採用し英語教育部門を平成18年度に設けた。平成20年度末からは、佐賀大学における英語教育のさらなる展開を図るべくネイティブ英語教員を高等教育開発センターに配置換し、留学生センターの併任教員とした。日本語教育研究部門では、全学教養教育、日本語研修コース、短期プログラム、総合コース及び日本語教員養成コースの授業を担い、全学の留学生の日本語修得に貢献している。英語教育部門では、全学教養教育のほか、留学のための英語教育(TOFELやTOIECスコアアップ講義)を行っている。

(分析結果とその根拠理由)

留学生のスピーチ報告会などを見ると、短期間に日本語能力が向上していることが分かり、留学生センターの日本語教育は効果的に実施されていると判断される。また、日本人の英語力の向上も著しい。

留学生センターの構成と業務については佐賀大学留学生センター留学生教育研究部門)参照。

基準 2-2 教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能されていること。
観点 2-2-1: 教授会が、教育活動に係わる重要事項を審議するために必要な活動を行っているか。

(観点到係わる状況)

留学生センターでは教授会に代わる留学生センター運営委員会で、教員人事、年度計画、

カリキュラム及び留学生の成績評価について審議され決定される。

(分析結果とその根拠理由)

留学生センター運営委員会の審議事項と報告事項は全て議事録としてまとめられ、全学部の委員をとおしてそれぞれの学部へ周知されている。議事要旨参照

観点 2-2-2: 教育課程や教育方法などを検討する教務委員会などの組織が適切な構成となっているか。また、必要な回数の会議を開催し、実質的な検討が行われているか。

(観点に係わる状況)

留学生センターは教員数が少ないので学部の教務委員会に相当する組織はない。しかし、各教育プログラムのコース毎に担当のコーディネーターを決め、コーディネーターを中心にカリキュラムや年次計画が作られる。その結果を運営委員会で説明・審議し、承認を得ている。

(分析結果とその根拠理由)

多くの場合、教務委員会がなくても担当コーディネーターを中心にして議論されている。その結果は必要に応じて運営委員会に諮る前に教員会議を開催し議論している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

留学生センター運営委員会で審議され、決定されるので客観的な判断のもとでカリキュラムや年次計画が立案されている。

(改善を要する点)

教務委員会に代わるものがないので、全て運営委員会で詳細に審議しなければならない。教務委員会に代わる小さな組織の設置の可能性について検討する必要がある。

(3) 基準 2 の自己評価の概要

留学生センターは平成 18 年度から、留学生教育研究部門と英語教育部門が設置された。留学生教育研究部門は全学の外国人のための日本語教育と生活指導が主たる業務であり、全ての教員が日本語教育の専門家であるので、留学生は短期間で著しく日本語能力を向上させることができる。他方、英語教育部門ではネイティブ教員が選択科目として英語教育を担当している。受講生の高い意欲もあって日本人学生の英語力は確かに向上している。

しかし、海外派遣日本人学生は留学生受入数に比べると10%弱であるのでその強化策が必要である。

平成18年度11月から全学の教育委員会に留学センター長がオブザーバーとして参加することになったので、全学的な教育制度を取り入れた留学生教育が可能となった。

留学生センターの日本語教員は平成18年度に1名退職者不補充となった。しかし、平成21年度からは、文化教育学部日本語教員養成のための講義4科目担当、留学生増に伴う日本語の講義の強化、日本人学生の海外派遣の強化のために留学生センター教員の増員が図られている。

4. その他

(1) 平成22年度の外部評価

平成23年2月、元佐賀大学長 佐古宣道氏に、平成21年度の留学生センターの自己点検評価報告書の外部評価を受け、評価手法、評価基準、評価の妥当性については、すべて妥当であると評価されたうえで、下記のような所感が提出された。

佐賀大学留学生センターは、平成12年4月文科省省令施設として設置されて以降、留学生教育部門と英語教育部門から構成される組織として、順調に発展してきたと評価されます。2つの部門はそれぞれの設置の目的に準じた各種のコースや多様な科目を設けて、カリキュラムの充実を図りながら、関係教職員が教育効果を高める努力を継続していることも特に印象深いものがあります。佐賀大学国際戦略構想により、留学生センターは国際交流センター（仮称）への組織替え案が進行しているようですが、この2つの部門の佐賀大学内での教育の重みは一層高まりますので、留学生センター長始め教職員の皆さんが今後とも課せられた役割に真摯に取り組んで頂きますよう期待します。

1) 日本語コースや日本語科目のカリキュラムなどの見直しにより、日本語教育システムを改善し、教育内容の充実を図っていることを評価します。今後、その教育効果などを十分に見極めることが肝要です。

2) 協定大学などの日本語教師を対象にする高度なブラッシュアッププログラムを新たに設置できないでしょうか。過去に具体的な要望がありました。

3) 留学生センターのホームページ（HP）の充実により学生諸君への情報提供が一段と拡充されたことは、当センターの広報活動の活発化を図ったことにも繋がり、評価されます。HPの管理や更新に係る労力の軽減を要するとの指摘もありますが、周知すべき情報については遅滞なくHP上で提供されるよう要望します。

また、HPの対応言語を4ヶ国語にする準備を進めているとのことでしたが、是非とも実現するよう要望します。

4) 帰国留学生へのフォローアップは必ずしも十分であるとは言えませんので、学部との連携を密にして全学レベルで今後とも充実を図るべきです。また、協定大学の協力を得て根拠となるサテライト室の設置、同窓会の主導によって各国での同窓会組織の立ち上げなどは、引き続いて優秀な留学生を確保するにも、有効な方策となります。実質的な進展を希望します。

5) 留学生宿舎の確保が進んでいることは評価されます。今後とも質の良い宿舎の整備プランを関係部署との連携により進めて頂くよう要望します。

6) 留学生及び日本人学生が気軽に交流できる留学生交流室の設置については評価できません。一方、留学生の心のケアが求められているケースが見受けられます。このことは、留学生の生活支援の一つとして見逃せない要件になりつつありますので、保健管理センター

との密接な連携を深めて適切に対応して頂くよう求めます。

7) 報告書の16ページには、農学部が学部の教員と研究者リストをSPACEの応募者にも閲覧可能にした結果、優秀な学生の応募者が増えたとの記述があります。今後は全学の教員と研究リストなどを公開すべきでしょう。

8) 外国大学との学術交流協定の締結では、学部間では具体的な交流内容などを取り決めた覚書を取り交し、同時に大学間協定を締結すべきでしょう。

9) ネイティブ教員による英語授業のアンケートの結果を見ると、学生の評価も高いので、今後、授業コマのさらなる増加などにより学生のスピーキング、ヒヤリングの英語力を高めていくべきです。このことは、就職可能な企業を増やすことや日本人学生の少ない留学志願者を増加させることも期待されます。

10) 「佐賀大学留学生センター紀要」を年次ごとに発行し、研究論文を始め諸々の活動状況を報告していることは評価します。法人化以降、教員研究費が減少していますので、科研費を含めた競争的資金の獲得のために一層の努力と、合わせて教員の研究野さらなる進展を要望します。

添付資料一覧

- ・ 佐賀大学留学生センター規則（資料 1）
- ・ 平成22年度留学生センター運営委員会議事録（資料 2）
- ・ 佐賀大学留学生センター紀要第9号、（資料 3）
- ・ 佐賀大学留学生センター紀要第10号（資料 4）
- ・ チューターの手引き（資料 5）
- ・ 佐賀地域の留学生に係る生活実態調査報告書（資料 6）
- ・ 平成22年度春季外国人留学生オリエンテーション（資料 7）
- ・ 平成22年度秋季外国人留学生オリエンテーション（資料 8）
- ・ 国際交流会館入居者選考基準（資料 9）
- ・ 平成22年度佐賀大学寄宿舍（楠葉寮）入寮者募集要項（資料10）
- ・ NPO法人国際下宿屋宿舍一覧（資料11）
- ・ 大学における組織図（資料12）
- ・ 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置要項（資料13）
- ・ 佐賀大学留学生センター長及び副センター長選考規程（資料14）
- ・ 佐賀大学留学生センター留学生教育研究部門（資料15）

平成22年度

ネイティブ・インストラクターによる
英語教育の成果報告書

目 次

概要 2010	1
授業科目	2
時間割	6
授業アンケート結果		
授業アンケート	8
集計結果	9
学生のコメントのまとめと評価	11
社会貢献	12
今後の課題	13

2010 年度概観

留学生センター 副センター長
英語教育部門
早瀬 博範

2006年度に「英語ネイティブ教員による英語運用力強化」事業として、新規に英語のネイティブ・インストラクター5名を採用し、半期50コマの授業を開講し、学生の英語コミュニケーション能力の強化に努めてきた。ネイティブ教員のクラスの授業基本方針は、以下の3点である。

- (1) 少人数教育 (1クラスの受講生10人から16名以下)
- (2) プレイメントテストによる習熟度別クラス編成
- (3) コミュニケーション能力の育成強化に特化

2008年度には、当初留学生センターで採用の際に設定した3年間の任期終了に伴い、3年間の5名の教員の教育成果を検証・評価し、事業の総括を行った。

その結果、5名すべての教育成果とその貢献度を高く評価し、事業に新たに「カリキュラムと教材の開発」という内容を加え、第2期は高等教育開発センターの教員として新規採用し、本事業を継続発展させることにした。彼らの所属は高等教育開発センターになったが、授業の実施は、これまでと同様、留学生センターの英語教育部門で継続して行うこととし、教員は全員、留学生センターの併任教員とした。本報告書では、留学センターで企画実施した授業を中心に彼らの教育活動を報告する。

しかしながら、今年度からは、この基本方針は守りつつ、ネイティブ教員の実施する授業の約半分（半期約25コマ）を学部大学院の授業担当とすることで、単位化することにした。もともとオプションの25コマの授業は、単位は出ないが、学生のニーズやレベルに合わせて意欲のある学生の英語力を特別に訓練するという目的で始めたものであるが、学生の学習意欲の維持の観点から、単位化した方がいいとの判断による大幅な変更である。25コマの授業の単位化と、アカデミックな英語能力の育成というのがその趣旨である。

この変更は、ネイティブ教員の活用として何を目標とするかに大きくかわるものである。この変更が果たして彼らの活用法として良いものであるかについては、今後の成果を見て判断することになると思われる。

彼らの活用法に関しては、2011年4月に創設された「全学教育機構」での主要な議論となるが、今回の変更の成果を踏まえつつ再検討をしなければならぬ。

2010年度もネイティブ教員のクラスは、教養教育の「英語」として、新入生の約6割が受講を希望しており、学生のニーズは高い。しかも本授業のおかげで留学を達成できたという学生も出てきていて、本事業の成果は着実に表れているのは間違いないので、全学教育機構でのプログラムに更なる充実に期待がかかっている。

授業科目 2010

ネイティブ・インストラクターによる授業は、2009年度から大きく次の3つに分かれて実施されている。5人合計で、一学期約50コマ実施している。授業の内容と目的は以下の通りである。

<教養教育英語必修科目>

教養教育機構で、必修単位として開講されている。1科目1単位。現在は、1年生用として開講。ネイティブ教員の受講希望者に対し、プレースメントテストによりレベル分けをおこない、各クラス16名以下の少人数クラスである。

〔注〕ただし、医学部の場合は、医学部独自のカリキュラムが決められていることから、上記のルールは、適応せず、1年生全員の受講で、プレースメントテストも行わないで開講し

た。その結果、少人数制は実施できていない。

○「アクティブ・イングリッシュ I (=Active English I)」

高校までの基礎的な能力を基盤にして、英語でコミュニケーションを行うために必要な基礎的な単語や表現を取得し、それらを実際可以使用できるレベルまで高めるためのトレーニングを行う。4技能の中でも、特にリスニングとスピーキング技能を強化させる。

○「アクティブ・イングリッシュ II (=Active English II)」

AE I で得た能力を基盤として、より実践的なコミュニケーション能力を習得することを目的とする。異文化交流の場面で生じるさまざまな社会的・文化的テーマを取り上げ、自己表現・意思伝達のための技能をトレーニングする。リーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの4技能の基礎的能力がバランスよく育成されるようにする。TOEIC 400点レベルを目指す。

○「アクティブ・イングリッシュ III (=Active English III)」

AE II までに得た能力を基盤として、実践的なコミュニケーション能力を習得することを目的とする。スピーチやディスカッションなどの実践的なトレーニングを行う。4技能のバランスの良い育成と強化を図る。TOEIC 450点レベルを目指す。

<学部・大学院選択科目>

2009年度から新たに実施したもので、学部レベルとしては、文化教育、経済、農学部で、大学院レベルとしては、工学系研究科で実施している。学部・大学院の授業なので、アカデミックな英語(English for Academic Purposes)の育成を目指す。

各学部・大学院の授業内容に応じて、以下のような授業が設定されている。すべて各学部大学院において、単位化されている。

○文化教育学部：

「**実践英語(=Practical English)**」

専門課程で必要になる英語での論文作成や口頭発表の基礎的な技術を育成を目指す。

「**専門教育外国語(=English in Special Course)**」

各専門分野に特化して英語による論文作成や口頭発表の実践的訓練を行う。

○経済学部：

「**アカデミック・スピーキング (Academic Speaking)**」

英語による学会発表やディスカッションに必要な英語力を強化するための授業。ディベートなどを取り入れ、口頭発表に必要な基本的な表現法や応答の仕方などを通して、英語によるスピーチコミュニケーション能力を身につけさせる。

「**アカデミック・ライティング (Academic Writing)**」

英語によるレポートや論文作成の実践的な演習。実際にレポートや論文を作成し、添削指導などによって、論文の書き方を習得する。

「**トイック・スコア・アップ (TOEIC SCORE-UP)**」

トイック・テストのスコア・アップのための対策講座。

○農学部

「**アカデミック英語コミュニケーション (Academic English Communication)**」

専門分野に関連した内容について英語での発表やディスカッション能力の育成を目指す。

「**アカデミック英語プレゼンテーション (Academic English Presentation)**」

専門分野に関連した話題について英語のプレゼンテーション能力の育成を目指す。

○工学系研究科

「**科学英語特論 (Advanced Study of Scientific English)**」

大学院の学生の論文執筆、学会等でのプレゼンテーション能力を実践的に訓練する。

<選択科目>

学生のニーズに合わせて、以下の授業科目を留学生センターにて開講する。前述の学部・大学院授業と同様に、アカデミックな英語の育成を目指す。学生のニーズ、特に留学目的の学生のための授業として設定している。

教養教育運営機構の単位数とは無関係に履修できるが、各授業担当教員が設定している受講基準を満たさなければならない。

なお、特に医学部の学生の便宜を考え、夏期と冬期の集中の講座としても一部開講した。

○ 「**アカデミック・ライティング(=Academic Writing I)**」

大学でのレポートや論文作成に必要なライティングの能力を高めるための基盤となる授業。英語で論文が書けるように、まず、論理的な思考法や論構成、論文特有の表現など、論文作成の基礎的な内容について講義する。1クラスの人数を15名程度に制限する。

○ 「**アカデミック・ライティング(=Academic Writing)**」

英語によるレポートや論文作成の実践的な演習。

実際にレポートや論文を作成し、添削指導などによって、論文の書き方を習得する。1クラスの人数を10名程度に制限する。

○ 「**トーフル・ストラテジー(=TL Strategy)**」

TOEFL のスコア・アップのための攻略講座。TOEFL の出題形式に合わせて、リスニング、文法力、読解力を強化するための訓練をおこない、留学に必要な550点を目指す。1クラスの人数を20名程度に制限する。

○ 「**トイック・スコア・アップ(=TOEIC SCORE-UP)**」

TOEIC のスコア・アップのための対策講座。TOEIC の出題形式に合わせて、リスニング、文法力、読解力を強化するための訓練をおこない、各学生がTOEIC において100点アップを目指す。1クラスの人数を20名程度に制限する。

○ **留学準備(Study Abroad : Living Skills)**

海外留学に必要な英語力に習得と、授業の受講の仕方、生活の仕方などに

についての基本的な知識を身につけ、留学を成功に導くための準備のための実践的な授業。

○ 「**海外英語研修**」

一ヶ月の海外での語学研修を含んだ授業で、語学学校での研修とホームステイをとおして、海外での生活に必要な英語力と文化的な知識を実践的に身につけることを目的とする。日本での事前・事後の授業をおこなう。プログラム修了者には、教養教育の単位2単位が与えられる。具体的には次の2つのプログラムを実施している。

「**パシフィック大学ホームステイ・プログラム(=Pacific University Homestay Program)**」

毎年9月に米国オレゴン州パシフィック大学での1ヶ月の語学研修。7名参加

「**ラトロブ大学ホームステイ・プログラム(La Trobe Homestay Program)**」

毎年3月にオーストラリア、メルボルンのラトロブ大学での1カ月の語学研修。10名参加。

○ 「**フード・カルチャー**」 (Culture in Food)

英語圏の文化を比較する。特にその国の食物に注目して、そこからそれぞれの国の歴史や文化を探る。

	I 8:50 10:20	II 10:30 12:00	III 13:00 14:30	IV 14:40 16:10	V 16:20 17:50
Mon		英語 N Medicine (医学部) Active English III Bowman 1202 Active English III Fellner 1203 Active English III South 1204	C: Practical English -Angove 教養教育 145		A(3): Academic English Communication (応用生物科学科)-Angove LM2
Tue		E: Academic Speaking A -Fellner 経 133 E: Academic Speaking B-Meyerhoff 経 134	E: TOEIC Score Up -Bowman 経 125	C: Practical English -Angove 教養教育 216	A(2): Academic English Communication (生命機能科学科)-Meyerhoff 農学部 1号館 2階第4講義室 C: Practical English -Angove LM2
Wed		Advanced Study of Scientific English S: ASSE -South 教養教育 214 S: ASSE -Fellner LM1 S: ASSE -Meyerhoff 教養教育 213 (大学院)	S: ASSE -South 教養教育 134 S: ASSE -Meyerhoff 教養教育 231	英語 N Economics (経済学部) Active English I Bowman 143 Active English II Angove 222, LM2 Active English II Fellner 213 Active English III South 134 Active English III Meyerhoff 216	英語 N Science & Engineering(理工学部) A Active English I Bowman 143 Active English II Fellner 213 Active English II Angove 222, LM2 Active English III Meyerhoff 216
Thu			E: Academic Writing I -Bowman 経 124 E: Academic Writing II -Fellner 経 125	C: Practical English -Angove LM1	英語 N Agriculture (農学部) Active English I Bowman 143 Active English I South 214 Active English II Angove 222, LM2 Active English II Fellner 213 Active English III Meyerhoff 216
Fri		ISC: TOEIC Score Up -Bowman 経 133		英語 N Culture & Education (文化教育学部) Active English I Bowman 143 Active English II Angove 222, LM2 Active English II Fellner 213 Active English III South 214 Active English III Meyerhoff 216	英語 N Science & Engineering(理工学部) B Active English I Bowman 143 Active English I South 214 Active English II Angove 222, LM2 Active English II Fellner 213 A(3): Academic English Communication (生物環境科学科)-Meyerhoff 農学部 1号館 2階第4講義室

E:経済学部開講科目(5) C:文化教育学部開講科目(4) S:理工学部開講科目(5) A:農学部開講科目(3) ISC:留学生センター開講科目(7) 英語 N:教養英語科目(26)

集中講義(intensive)等

ISC: Pacific University Homestay Program /South

ISC: Study Abroad: Living Skills /South

ISC: TOEFL Strategy /Meyerhoff

	I 8:50 10:20	II 10:30 12:00	III 13:00 14:30	IV 14:40 16:10	V 16:20 17:50
Mon		ISC: TOEIC Score-Up -Bowman	A: Academic English Presentations (生命機能科学科) -Angove 総情小		英語 B Medicine (医学部) Active English III Meyerhoff Active English III South ISC: ICE: Culture in Food -Angove A: Academic English Presentations (応用生物科学科)-Bowman 農 4
Tue		E: Academic Speaking A -Fellner 演 7 E: Academic Speaking B -Meyerhoff 演 9	E: TOEFL Strategy -Meyerhoff LM 1 ISC: TOEIC Score Up -Bowman		A: Academic English Presentations (生物環境科学科)-Fellner LM1 C: Practical English -Bowman
Wed		Advanced Study of Scientific English S: ASSE -South 教 222 S: ASSE -Fellner	S: ASSE -South 222 S: ASSE -Angove LM2	英語 N Economics (経済学部) Active English I Bowman 143 Active English II Angove 222 + LM2 Active English II Fellner 215 Active English III South 214 Active English III Meyerhoff 216	英語 N Science & Engineering(理工学部) A Active English I Bowman 143 Active English II Angove 222 + LM2 Active English II Fellner 215 Active English III Meyerhoff 216
Thu		C: Practical English -Fellner C: Practical English -Meyerhoff C: Practical English -Bowman	E: Academic Writing I -South LM 1 E: Academic Writing II -Meyerhoff 理 318		英語 N Agriculture (農学部) Active English I Bowman 141 Active English I South 144 Active English II Angove 222 + LM2 Active English II Fellner 145 Active English III Meyerhoff 216
Fri				英語 N Culture & Education (文化教育学部) Active English I Bowman 141 Active English II Angove LM2 Active English II Fellner 145 Active English III South 144 Active English III Meyerhoff 213	英語 N Science & Engineering(理工学部) B Active English I Bowman 141 Active English I South 144 Active English II Angove 222 + LM2 Active English II Fellner 145

E:経済学部(5), C:文化教育学部 (4), S:理工学部 (4), A:農学部(3), ISC:留学生センター開講科目(7) 英語 N:教養英語科目(25)

ISC 集中講義科目等:

LaTrobe Homestay Program Angove

Study Abroad: Living Skills Angove

TOEIC Score Up -Fellner

Academic Speaking B (advanced) -South

学生による授業評価アンケート結果 2010（抜粋）

他の授業同様、ネイティブ教員の全ての授業において、授業アンケートをとっている。プログラムが始まって3年間は、独自にアンケートを作成し評価を行っていたが、4年目からは、他の授業と同じ一般の「学生による授業評価アンケート」を使用している。

ここに抜粋し掲載したデータは、ネイティブ教員の行った全ての授業を対象として、授業評価に直接繋がる以下の6項目に関する平均点である。満点は5点である。

<評価項目>

- ① この授業の内容は理解できる。 <B-1>
- ② この科目を受講してみて、内容への興味が増してきた。 <B-2>
- ③ 教材は分かりやすかった。 <B-4>
- ④ 授業を分かりやすくする工夫が感じられた。 <C-1>
- ⑤ 学生の質問に適切に対応してくれている。 <C-2>
- ⑥ この授業を受講して満足が得られた。 <D -1>

この結果より、ネイティブ教員の授業は、すべての授業において、しかもすべての項目において4点以上の数値を出しており、学生にとってその授業は十分理解でき、かつ満足のいくものであったことが示されている。

授業アンケート結果(抜粋)
2010年度

授業科目名(前期)	Name	B1	B2	B3	C1	C2	D1
英語	B	4.053	4.079	4.171	4.230	4.284	4.408
TOEICスコア・アップ	B	4.000	4.000	3.889	3.750	4.375	4.444
アカデミック・ライティング I	B	4.333	4.333	4.222	4.222	4.444	4.556
英語	M	4.283	4.415	4.151	4.302	4.528	4.327
アカデミック・スピーキングB	M	4.500	5.000	5.000	5.000	5.000	5.000
科学英語特論	M	4.143	4.143	3.750	4.286	4.357	4.346
アカデミック・コミュニケーション	M	4.083	4.208	3.792	4.125	4.333	4.042
英語	S	3.959	3.945	3.811	4.014	3.973	4.000
科学英語特論	S	3.769	3.962	4.077	4.269	4.269	3.962
科学英語特論	S	3.769	3.962	4.077	4.269	4.269	3.962
英語	F	4.430	4.312	4.290	4.387	4.424	4.500
アカデミック・スピーキングA	F	4.200	4.600	4.800	4.600	4.800	4.400
アカデミック・ライティング II	F	4.000	4.667	4.000	4.000	4.667	4.667
科学英語特論	F	4.182	4.273	4.364	4.455	4.636	4.400
科学英語特論	F	4.182	4.273	4.364	4.455	4.636	4.400
Average		4.13	4.28	4.18	4.29	4.67	4.36
授業科目名(後期)	Name	B1	B2	B4	C1	C2	D1
英語	B	4.267	4.267	4.333	4.333	4.333	4.400
英語	B	3.857	4.286	4.143	4.286	4.286	4.143
英語	B	4.091	4.091	4.364	4.636	4.636	4.455
英語	B	4.200	4.267	4.000	4.267	4.333	4.267
英語	B	4.111	4.111	4.222	4.333	4.111	4.444
アカデミック・プレゼンテーション	B	4.000	4.500	4.000	5.000	5.000	4.500
実践英語	B	4.500	4.500	4.250	4.250	4.250	4.500
実践英語	B	4.000	5.000	5.000	5.000	5.000	5.000
英語	B	4.167	3.833	4.000	3.667	4.000	3.833
英語	B	4.000	4.143	4.143	4.143	4.143	4.286
英語	B	4.333	4.400	4.533	4.467	4.667	4.667
英語	B	4.000	3.750	3.500	3.500	3.750	4.250
アカデミック・ライティング I	B	4.000	4.000	4.000	5.000	5.000	5.000
科学英語特論	B	4.000	4.000	5.000	4.000	4.000	4.000
科学英語特論	B	5.000	4.000	4.000	4.000	4.000	4.000
科学英語特論	B	4.000	4.000	5.000	4.000	4.000	4.000
科学英語特論	B	5.000	4.000	4.000	4.000	4.000	4.000
英語	A	3.833	3.833	3.500	4.000	4.333	4.167
英語	A	4.200	4.100	4.100	4.100	4.200	4.100
英語	A	4.143	4.143	4.286	4.429	4.429	4.429
英語	A	3.750	3.667	3.833	4.167	4.250	4.083
授業科目名	Name	B1	B2	B4	C1	C2	D1
英語	A	3.800	3.800	4.000	4.400	4.600	4.400
科学英語特論	A	3.333	4.000	3.667	4.000	4.333	4.000
アカデミック英語プレゼンテーション	A	4.000	5.000	5.000	5.000	5.000	5.000
英語	F	4.000	4.000	4.000	4.000	4.400	4.600
英語	F	4.200	3.800	4.100	4.000	4.000	4.400
英語	F	4.000	4.000	3.667	4.000	4.500	4.000
英語	F	4.111	4.222	4.222	4.333	4.556	4.444
英語	F	4.000	3.714	3.714	4.143	4.000	4.143
アカデミック・スピーキング A	F	5.000	5.000	5.000	5.000	5.000	5.000
科学英語特論	F	3.000	3.667	3.667	4.333	4.333	4.333
科学英語特論	F	3.000	3.667	3.667	4.333	4.333	4.333
アカデミック英語プレゼンテーション	F	3.667	4.167	4.333	4.167	4.500	4.333
実践英語	F	4.000	4.000	2.000	4.000	5.000	4.000
英語	M	3.714	4.000	3.714	4.429	4.571	4.429

授業アンケート結果(抜粋)
2010年度

英語	M	3.857	3.857	3.857	4.000	4.143	4.000
英語	M	3.600	4.000	3.600	4.000	4.000	4.000
英語	M	4.100	4.100	4.000	4.100	4.100	4.000
TOEFL ストラテジー	M	3.333	4.000	3.000	4.333	4.333	3.667
アカデミック・ライティングⅡ	M	4.000	4.000	4.000	4.000	4.000	4.000
Average							
		4	4.1	4.04	4.25	3.36	4.29

学生のコメントのまとめと評価 2010

1. 授業アンケートにおいて、**enjoy, interesting, fun**、そして、**useful, helpful** というという表現が多く見られるように、多くの学生が授業を楽しみ、満足度も高い。しかも、役に立ったと高く評価している。
2. 少人数クラスであることが、授業効果を上げている。
3. ネイティブの授業ということで、「難しい」という感想もあるが、教員の対応に関して、多くの学生がフレンドリーで、丁寧であるという評価をしている。結果、授業への出席率も高く、授業の理解にもつながり、授業を通して「上達」を実感できている点は大きい。
4. ほとんどの学生が、英語に触れる機会が増え、英語を勉強する時間が増えたと評価している。
5. 宿題の多さを多くの学生が指摘しているにもかかわらず、宿題を課されたことが役に立っていると、結果的に良かったと評価している。

社会貢献（2010年度分）

以下の地域及び学内の事業に対して、英語教育部門の全員が参加協力し、指導助言を行っている。

2010年

- 8月 佐賀県中学校英語部会主催による「佐賀県中学校英語ディベート・コンテスト」
講習会での講師および審査員
- 10月 佐賀県高校英語部会主催による「佐賀県高校英語スピーチ・コンテスト」審査員
- 11月 佐賀県高校英語部会主催による「佐賀県高校英語ディベート・コンテスト」審査員

2011年

- 1月 佐賀大学地域貢献事業「佐賀大学杯高校生ディベート選手権大会（英語部門）」審査員

今後の検討課題 2010年

1. 学部大学院での授業の有効性

2009年度から開始した学部大学院での授業は、極端に英語レベルが低い学生が受講し、必ずしも高度な英語力育成になっていないクラスもある。

2. 教養必修科目 **Active English** のあり方

多くの学生にネイティブ・スピーカーの英語に触れさせるという趣旨で、教養教育の授業として一学期25コマを開講しているが、このような幅広いレベルの学生対象のクラスを担当させることの有効性は検討すべきである。

3. プレースメントテストの実施の効率化

4技能が短時間にウェブなどを使って実施できるようにする。

4. 医学部のカリキュラムの特殊性

医学部のカリキュラムは、本庄キャンパスで実施されているカリキュラムと異なる点があり、統一する必要があるのではないだろうか。

5. 少人数授業に適した教室の整備

20名程度の学生の授業に適してサイズの教室があると望ましい。

6. ネイティブ教員一人10コマの負担

当初から、授業に特化してもらおうということで、一人一学期10コマの授業負担を課しているが、他の教育プロジェクトや地域貢献等にも従事させるようになってきているので、コマ数の軽減を検討すべきである。

7. 日本人英語教員との協働

5名のネイティブ教員は、プロジェクト形式でチームとして活動をしているため、他の英語の授業との関連性や共同作業もない。佐賀大学の英語教育の改革に向けて、一緒に活動できるような体制にすべきではないだろうか。

8. 留学生との交流

受講対象者として、現在は日本人学生だけにしているが、留学生も混じったクラス編制があるともっと魅力的なクラスとなるのではないだろうか。